

活動名	1. 子どもの虐待予防活動
-----	---------------

◆ これまでの取り組み

心療科における被虐待児の治療と連携をしながら、親支援や地域とのサポート体制づくりをし、虐待の再発予防・家庭再統合に役割を果たしている。また、センター全体でも虐待を早期発見し、支援ができるようにと、院内関係スタッフからなる虐待ネットワーク委員会を発足し、当センターを受診される要支援家族への支援と院内の体制整備に努めている。

虐待の予防にも視点を置き、県内の周産期医療機関や保健機関と協働で予防システムの構築をすすめている。

◆ 活動内容

1. 虐待予防・支援のための保健医療相談活動

1) 専門家への対応と事例への対応

虐待・虐待予防に関する保健医療相談は1,242件で全相談の22.6%であった。うち保健師が対応した1,214件についてみると、電話が607件、面接相談が569件、訪問が1件、カンファレンス24件、文書・メールが8件、その他が5件であった。専門家との相談が556件(45.8%)と最も多く、次いで母の446件(36.7%)、本人98件(8.1%)、父16件(1.3%)、祖父母4件(0.3%)、きょうだい2件(0.2%)、その他・不明92件(7.6%)であった。

相談の内容は親への支援1,058件(87.1%)、子どもへの虐待69件(5.7%)、子どもへのケア50件(4.1%)、その他37件(3.1%)であった。

時間外電話相談にも29件の相談があった。

2. 院内での虐待の早期発見・支援活動

1) 虐待ネットワーク委員会ケース検討会議の実施

今年度新規事例19事例、継続事例24事例、計43回開催した。

地域関係機関を含めた検討会議は41事例、院内関係者のみでの検討会議は2事例、延べ527名の関係者の参加があった。

2) 院内虐待ケースの進行管理カンファレンスの実施・充実

月1回を目安に計10回開催した。今年度新規事例106事例、延べ157事例について進行管理を行った。新規事例の現在の受診状況や地域での支援状況について、毎年調査を実施しているが、平成21年の新規事例106件については、継続受診中が83件(78.3%)、転院・終了が7件(6.6%)、治療は中断だが地域での支援が継続している事例が4件(3.8%)で、治療中断でかつ状況が不明は3件(2.8%)であった。

平成17年の事例186件について、21年にあらたに不明となった事例は2件(1.1%)、平成18年の144件、平成19年の127件、平成20年の120件については、あらたに不明となった事例はなかった。中断事例もあったが、児童相談所や地域の保健、福祉関係者が引き続き介入を続ける中で、再度受診となった事例もあった。

第3章 活動別の実績とその評価

3. 周産期からの虐待予防活動

1) ハロー・ファミリーカードプロジェクトの拡大・充実

今年度は岡崎市保健所、豊川保健所の本所及び蒲郡分室、豊橋市保健所、一宮保健所、知多保健所から新たにカードの導入を検討したいという希望があり、会議や研修会とうに参加しプロジェクトの導入を図った。平成22年度から岡崎市保健所、豊川保健所の本所及び蒲郡分室、一宮保健所は利用が決定した。

2) 保健機関における周産期から乳幼児期の保健活動の集約と医療機関等への情報提供

周産期医療機関との連携を図るため、保健機関に対し、乳幼児期の母子保健活動についての情報更新を依頼し、ホームページに情報を提供した。

3) 研修会の開催

講師に特定非営利活動法人「子ども虐待ネグレクト防止ネットワーク」の理事長である山田不二子先生を招き、周産期医療現場スタッフが取り組む子育て支援に関する研修会を開催した。「乳幼児揺さぶられ症候群（SBS）の発生機序と予防対策について」というテーマで講演をしていただいた。人形や生卵、DVDなどを使い、非常に具体的に知識と対策についてお話しいただいた。当日は保健機関が32名、周産期医療機関が13名、児童相談所が2名の計47名の参加があった。内容については大変好評で、具体的で参考になった、SBSの予防対策推進に自分も何らかの支援ができるという意見も多かった。

4. 調査・研究

平成21年度 厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）「虐待に関する医療間および他機関との連携の在り方に関する研究」で、要保護家庭を早期に支援するシステムにおける県型保健所の役割に関する研究を実施した。

東海公衆衛生学会において「周産期からの子育て支援支援に取り組むスタッフをつなぐ～ ハロー・ファミリーカード・プロジェクト」について示説発表した。また日本子ども虐待防止学会第15回学術集会埼玉大会において「小児専門病院での取り組みから虐待予防に必要な支援を考える」について示説発表した。

◆ 評価方法

1. 虐待に関する保健相談の推移
2. 地域とのネットワーク会議の実施
3. 院内虐待ケースの進行管理カンファレンスの内容分析
4. 「ハロー・ファミリーカードプロジェクト」の推進状況

◆ 評価

虐待・虐待予防に関する保健・医療相談は昨年度よりやや増加した。相談者は専門家との相談が最も多く、次に母との相談が続くのは昨年度と同様の傾向で、関係機関と連携した継続支援と親支援が保健師の重要な役割であると改めて確認できた。

院内での虐待対応は、心療科のみでなく、他科とも連携した対応が必要であった。院内で発見された他科事例への対応も保健部門が外部機関との窓口となり、速やかに行うことができた。一時保護事例の入院については、院内関係部署と連携をしながら、保護児及び関係スタッフの安全に配慮した対応を行った。年々、重症事例も増えているので、今後もこうした事例への対応を振り返りながら、よりよい支援体制整備を検討

していきたい。また、センター職員全員が虐待予防の視点が持てるよう、改めて虐待ネットワーク委員会の活動や、ケースの連携や子育てスクールを通し、院内の体制整備・意識の向上に努めていきたい。

保健では、虐待対応のみでなく虐待予防に視点を置き、周産期からの虐待予防を目的にハロー・ファミリーカードプロジェクト事業、乳幼児期の保健活動の情報提供、研修などを実施している。

ハロー・ファミリーカードは平成22年度から岡崎市保健所、豊川保健所の本所及び蒲郡分室、一宮保健所で導入が決定した。引き続き検討中の地域へも導入を勧めていきたい。また、プロジェクト参加機関も増える中でスタッフの意識向上のため、ファミカ通信等を通して支援に積極的に取り組んでいきたい。今後も虐待の早期発見・再発防止、院内の体制整備と虐待予防に視点を起し、事業を展開させていきたい。

活動名	2. 時間外電話相談活動
-----	--------------

◆ これまでの取り組み

当センターでは、平成13年11月のオープン時より、地域の保健機関が閉庁する午後5時から9時までの間、専門相談員が育児や母子の健康についての相談に対応する本事業を実施してきた。

開設当初より17年度まで相談件数は増加し、その後は受容力からもほぼ横ばいであった。電話に対応できなかった未着信数は、17年度より減少してきているものの2,000件余りあり、依然ニーズにこたえきれていない実状であった。家庭の中で孤立した育児をしている母親の悩みや心配に対応しており、県の内外から大きな信頼を受けている。

相談内容の分析から、子どもの病気、手当てについての件数が最も多く、次いで事故相談と、救急に受診する前段階の相談に対応し、救急受診の篩い分けの役割や母の手当てに対するねぎらいや不安に対する受容や見通しについての助言などを行っている。また、子どもの発育・発達・日常生活等、相談相手のいない母の不安の受け皿として重要な役割を担っている。

◆ 活動内容

1. 専用電話相談窓口「育児もしもしキャッチ」の運営

電話相談員の体制を1日当たり3人として実施したが、相談員の確保が困難（必要人員の88%の充足率）で、しばしば平日も2人体制で実施した。

相談件数は、6,153件で昨年度（6,294件）の97.8%であった。応対不能件数 件を加えた総着信数は7,703件（H20年度8,675件）であった。相談対象者は「子ども」が97.7%で、「本人自身」が4.6%であった。相談内容は「育児相談」が95.4%を占めていた。育児相談のなかで最も多かったのは、「子供の病気と手当て」に関するものの46.3%であった。「事故相談」が12.8%、「家族・人間関係」に関するものが8.5%、「泣き」等の「日常生活」に関するものが8.0%の順であった。「虐待」に関するものは13件で、気になる事例については地域の関係機関の支援を受けているかを必ず確認し、関係機関への相談を勧め、本人の同意の下児童相談所等関係機関への連絡をしたケースもあった。

第3章 活動別の実績とその評価

2. 専門相談員の連絡会(研修会)

回	テーマと講師	受講者数
1	講義「子どもの予防接種～激変する予防接種対策～」 総合診療部長 山崎嘉久	9人
2	事例検討「育児不安を訴える母」への対応 臨床心理士 今本利一	9人
3	講義「知って活かそう、今どきの離乳食、幼児食事情」 日本子ども家庭総合研究所母子保健研究部栄養担当部長 堤ちはる	14人
4	座談会「小児救急電話相談から学ぶこと」 愛知県小児救急電話相談 相談看護師 須場今朝子	6人

母の主訴を十分聴きとる技術を学び、最近の医療や育児に関する知識を得るため4回（外部講師による研修を2回を含む）実施した。

3. 時間外電話相談員業務マニュアルの作成

時間外電話相談の業務手順、約束、苦情対応などのマニュアルを作成。

4. 時間外電話相談「育児もしもしキャッチ」相談情報分析

5. 育児もしもしキャッチの広報活動

案内カードの配布（保健センター、保健所、子育て支援センター、医療機関等）、子育てネット情報、iモード、母子健康手帳挟み込みの「パパとママへのお知らせ」や「父子手帳」に案内を印刷

6. 相談員確保のための活動

◆ 評価方法

1. 相談情報の分析

件数、対応不能件数、地域、相談経路、時間帯、所要時間、相談者の続柄、対象者の年齢、相談内容、結果についての分析

2. 相談員連絡会の参加者数と参加者の感想

◆ 評価

相談件数は6,153件（月平均512.8件）と昨年度よりも減少した。が、依然、県民の高いニーズがあると認められ、今後の事業の継続が期待される。

対応不能件数は1,550件（月平均129件）、総着信数は7,703件であったが、3人の相談員が確保できない時もあり、県民のニーズに十分応えることができなかった。

相談内容は育児相談が95.4%を占め、孤立化する育児環境のなかで気軽に相談できる窓口として、育児不安の軽減に寄与した。相談の46.3%に及ぶ「子どもの病気や手当て」、「事故相談」では、夜間救急の受診へ迷いをかかえる母等に対する不安軽減のサポートや、具体的な発熱、下痢の手当について情報提供ができた。また、出産後早期に育児不安を訴える相談者には、地域の保健サービス等を具体的に知らせ、利用に

つなげた。「だれも育児の大変さをわかってくれない。」と母のつらさ、不安に共感や傾聴を求められる相談もしばしばあり、育児支援の一助となった。相談情報の分析からでてきた母子保健のニーズを、地域保健関係者に還元する事により地域の保健事業に活用してもらった。

相談員の研修会は、相談の質の向上のために4回実施し、外部講師により2回、院内の医師、臨床心理士を助言者に2回開催した。離乳食、幼児食の進め方では、その日から早速使える情報が多く、自信を持って助言できるよう知識の普及がなされた。また、小児救急医療相談の相談員から情報提供いただいた研修では、互いの役割の再認識がなされた。次年度は隔月年6回の研修を企画している。

引き続き相談員の確保（H22.3末28人）と質の向上に努めたい。

活動名	3. 母子保健スキルアップ研修
-----	-----------------

◆ これまでの取り組み

平成15年度から技術習得・現場還元型の研修として、市町村の保健師を対象に母子保健スキルアップ研修を実施してきた。平成15年度は乳幼児健診事後のカンファレンスをテーマとして実施。平成16年度は、虐待の事例に組織的に関わり保健師が一人で抱え込まない体制作りをテーマとした。平成17年度の研修内容は、子ども虐待の事例に取り組む場合の重要な3つのスキル（事例の評価と支援計画、家族との面接、ケースカンファレンス）の向上をねらいとした。平成18年度は、発達障害児とその家族に対する支援、平成19年度は市町村の乳幼児健診時の保育・家庭環境問題での支援について考えた。平成20年度は「母の病気による育児困難家庭への育児支援」についてグループワーク中心にアセスメントと支援について検討した。

◆ 活動内容

【テーマ】

「育児困難家庭への子育て支援」を考える

【目的】

- (1) 支援関係が作りにくい家族に対するアセスメントができ、支援計画の作成ができる。
- (2) 母及び家族への支援方法についての理解を深めることができる。
- (3) ロールプレイにより、面接技術を学ぶ。

【受講者】市町村保健師16名（経験5～15年）

【研修プログラム】

	日時	内容
1	9月18日(金) 13:30～16:30	<ul style="list-style-type: none"> ・ 講話及びロールプレイ 「育児困難家庭への子育て支援を考える」 講師： 学校法人同朋学園 同朋大学社会福祉学部 教授 白石 淑江 ・ グループワーク 事例を通じて研修で学びたいことと、次回検討する事例を選定

2	10月7日(水) 13:30~16:30	<ul style="list-style-type: none"> グループワーク「事例検討」 提出事例の中から1~2事例について、ワークシート ①情報の整理、②課題・目表設定、③具体的な支援(母・子)、 ④話し合いの中での気づきに沿って検討。
3	12月3日(木) 13:30~16:30	<ul style="list-style-type: none"> グループワーク これまでの研修の学びをいかし、実践した結果について検討。 <ul style="list-style-type: none"> 講話「家族を支える」 講師：あいち小児保健医療総合センター 臨床心理士 河邊眞千子

◆ 評価方法

研修修了時の受講者へのアンケート

◆ 評価

受講者へのアンケートの結果から

1. 受講者に第1回と第3回の研修終了後にケースへ支援をする中で以下の項目についてどの程度自信があるかについて10段階で回答を得た。

	第1回平均	第3回平均
ケースに関するアセスメント	5.13	5.87
支援計画の作成	4.70	5.50
実際の支援：母に対して	5.20	5.67
実際の支援：子に対して	5.47	5.67
関係機関との連携	5.40	5.60

いずれの項目でも、研修終了後自己評価は平均点が上昇している。

2. アンケートの自由記載から

「ロールプレイでは日頃の自分のくせに気づいた」、「ロールプレイの機会も少なく非常に参考になった。」、「情報を整理することで、改めて自分の情報不足に気づいた」等の感想があった。

3. まとめ

平成20年度、21年度の研修については、愛知県公衆衛生研究会で「母子保健スキルアップ研修の2年間の取り組みについて」として発表した。平成20年度の研修から、母への具体的な支援や信頼関係作りに対し自信が持てない様子が見られたため、21年度のプログラムには、ロールプレイを取り入れ、母とのコミュニケーションに役立てる技術を身につけてもらえるよう配慮した。不安定な母の行動に振り回されないように、シートの項目にしたがって事例の情報を整理することでアセスメントすることと、複数名で課題を検討することが支援には重要であると受講者も感じていた。今後の研修については、引き続きロールプレイと事例検討を組み合わせ、保健師の技術を向上できる企画を考えていきたいと考えている。また、事例への子育て支援をしていくための課題として、事例の情報を整理し、アセスメントするための記録用紙の検討と事例検討を通常業務に組み込む工夫が必要であるという受講者からの意見もあった。来年度も支援に必要な技術、方策を身につけ現場の業務に還元できるよう研修と実践を通じて学ぶことが出来るプログラムを企画したい。

活動名	4. ケースを通しての連携
-----	---------------

◆ これまでの取り組み

保健部門では、入院・通院患者さんで特に子育て支援の必要なケースに対して、院内の医療部門・地域と連携をとりながら支援をしている。

平成15年8月1日に保健室の保健師と医療部門の看護部長及び外来・病棟師長が一緒になり、連携についての打ち合わせ会を開催した。その際、医療部門と保健部門が連携を深めていく必要性についてお互いに確認し、様式「ケース連絡票」を作成した。

平成15年10月から、退院するケースについて、各病棟から作成した様式を使って（但し、急な場合は口頭で連絡あり。）保健部門への連絡があり、保健部門として地域を見据えた支援を開始した。年々子育て支援に関する課題を明確にし、改善しながら継続している。

平成18年度には、入院早期から必要な連携が行えるよう看護部と一緒に「サポート連絡票」の様式を作成し、入院時の問診時に、子育ての視点をもって問診ができるようにした。また、院内連携システムをよりわかりやすく、共有できるように「子育て支援マニュアル」を作成し支援を継続している。

平成19年度には、連携ケースの内、在宅酸素療法の必要なケースに対しては、医療部門と連携して、「HOT ケース連絡票・退院サマリー」の様式を作成した。

◆ 活動内容

1. 「子育て支援マニュアル」のケース連絡票を用いた連絡は、55件。

病棟別連絡件数では21病棟が33件、診療科別連絡件数では、循環器科からの連絡が32件と特に多くなっている。21病棟の33件については、「ケース連絡票」の様式によるものが25件、「HOT ケース連絡票・退院サマリー」による連絡件数は、8件であった。

また、55件全体では、「ケース連絡票」による院内連携は46件、「HOT ケース連絡票・退院サマリー」による連携は9件であった。

表1. 病棟別連絡件数

21病棟	33件
22病棟	5件
23病棟	2件
31病棟	9件
32病棟	4件
ICU	1件
外 来	1件
計	55件

表2. 診療科別連絡件数

アレルギー科	1件
腎臓科	6件
感染症科	1件
内分泌科	2件
神経科	3件
小児外科	3件
整形外科	1件
循環器科	32件
心臓外科	1件
心療科	4件
形成外科	1件

第3章 活動別の実績とその評価

2. 地域との連携方法

文書による確実な連携を心がけており、47件の内、文書で連絡した件数は、45件（95.7%）であり、ほぼ文書で連絡できた。連絡に対して文書で返信のあったのは、18件（40.0%）であった。連絡方法 その他は、電話により連絡をした件数であった。

連絡の有無	連絡方法	返信方法
連絡件数：47件	文書：45件	文書：18件
		電話：1件
		未返信：25件
		再入院：1件
	その他：2件	返信あり：0件
		未返信：2件
		再入院：0件
未連絡件数：8件		

◆ 評価方法

ケース連絡票による、支援内容や連携の検討

◆ 評価

1. 地域との連携について、文書による確実な連携を心がけている。3月に病棟から11件の連絡があったことも文書での返信が40%と低かった理由に考えられるが、今後退院後の情報把握を積極的にする必要はある。
2. 育児不安の問題ケースだけでなく、在宅療養環境を整えるために訪問看護ステーションを導入を必要とするケースが10件あり、入院中に病棟に来院してもらい病棟ナースと直接手技等情報交換してもらえる体制をつくり、効果的であった。
3. 平成19年度から、心療科・32病棟からの連携については、必要なケースについては、入院する前・外来受診時から（ケース連絡票を使わず）保健部門の保健師へ連絡があるというシステムができており、継続している。

活動名	5. 訪問看護ステーション研修
-----	-----------------

◆ これまでの取り組み

小児看護のスキルアップを図り、小児の受入れ態勢の充実を図る目的で、平成17年度から、訪問看護ステーション等に勤務する看護師等を対象に、研修会を開催している。

17年度 18年度	2日	腎疾患を持つ子どもの看護 人工腹膜透析の理論と実際
19年度	2日	循環器疾患の子どもとその家族への支援 在宅酸素療法の災害時・緊急時の対応、機器の取り扱い実習
20年度	1日	在宅管理を必要とする消化器疾患とIVH、ストーマ指導 在宅看護ケアの実際、ストーマケア・スキンケア演習

◆ 活動内容

今年度は、神経科疾患を主とした呼吸管理を要する子どもへの支援をテーマに実施した。

【目的】

看護処置を必要とする子どもとその家族が退院後も地域で支援を受けながら安心して療養生活を送れることが望まれる。神経科疾患をとおして吸器管理を要する子どもの在宅看護技術のスキルアップ及び退院後の支援体制の充実を図る。

【日時、参加人員】

10月11日（日）9：30～17：00

参加人員：29人 <職種：看護師25人、保健師3人、理学療法士1人>

【内容】

- ① 講義「呼吸器管理を要する小児神経科疾患の理解」
講師：神経科医長 糸見和也
- ② 講義「呼吸器疾患を持つ子どもへの看護」～人工呼吸器の実際～
講師：31病棟看護師 和田文子
- ③ 話題提供「在宅看護ケアの実際」～呼吸管理を要する子どものケア～
講師：訪問看護ステーションすみれ 管理者 森田 貞子（看護師）
- ④ 講義演習「呼吸管理・リハビリテーションの実際」
講師：リハビリテーション科 朝日利江、藤田ひとみ
- ⑤ 意見交換「病院と地域の連携」

◆ 評価方法

研修会終了後のアンケート調査

◆ 評価

県内266訪問看護ステーションに案内したところ、41施設64人の応募があったため、急遽、一施設1人の参加に限らせていただくこととなり、今回の内容への関心の高さが伺われた。

第3章 活動別の実績とその評価

【訪問看護ステーション経験年数】

1年未満：3人 1～3年：1人 3～5年：7人 5～10年：7人 10～15年：8人

【保健機関経験年数】

1～3年：2人 20年以上：1人

【感想】

- ・訪問看護STの仕事の実際のお話が聞けてよかったです。病院との関わりや行政へのフットワークも軽く、とても感動しました。保健師としては、家庭、病院以外にも訪問看護さんとかかわりをもっと増やしていきたいと思いました。(保健師)
- ・呼吸リハビリについて、実践することができてよかったです。
- ・神経系疾患の子どもに関しての指導やケアに不安がありましたが、積極的に受け入れることができるように思えてきました。
- ・小児の訪問が増えてきています。私自身小児科の経験がなく、戸惑いや不安があります。今回の研修はとても勉強になりました。呼吸リハは今まで行っていたスクイズと違って実際に行えてよかったです。
- ・病院と地域（訪問看護、保健師さん）の連携の実際について、ケースを通じてお話が聞けたらいいなと思いました。

【講義別の評価】

内 容	よい	←—————→			わるい	未記入
1)講義「小児の神経系疾患について」	15	14	0	0	0	
2)講義「呼吸管理を要する子どもの看護」	11	18	0	0	0	
3)話題提供「訪問看護の実際」	14	14	0	0	1	
4)講義「呼吸管理・リハビリテーションの実際」	20	9	0	0	0	
5)実技「呼吸管理・リハビリテーションの実際」	23	6	0	0	0	
6)意見交換	5	15	1	0	8	

【小児訪問看護の研修を受ける機会】

ある	21
数年に1回	4
ほとんどない	4
計	29



1回:8
≤5回:8
≤10回:1
≤15回:1

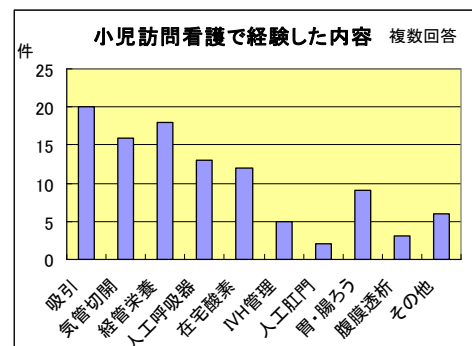
【受けた研修内容】

ターミナルケア(15) 腹膜透析(12) 人工呼吸器(11) IVHの管理(10)
 吸引(4) 気管切開(3) 胃・腸ろう(3) 人工肛門(3) 経管栄養(2)
 その他(4): 摂食・嚥下・食事介助・口腔ケア・リハ等

【参加施設の概況】

研修参加の25施設のうち23施設が小児訪問看護を受け入れていた。

経験のある看護ケア内容は、左図のとおりで、吸引、経管栄養、気管切開の順が多かった。



活動名	6. 保育リーダー研修
-----	-------------

◆ これまでの取り組み

障害児保育の充実により、多くの障害を持つ子どもが保育園で生活するようになり、それなりの成果をあげている。しかし、保育現場サイドから見ると、気になる子を含む、障害を持つ子どもたちをどのように理解し、どのように保育すればよいかについての系統的な理論や技術が十分に提供されているわけではない。そのため、子どもを直接担当する先生方は、高い情熱と意欲を支えに、子どもたちの問題行動への対応に試行錯誤と悪戦苦闘の連続の日々である。

平成15年度より当センターでは、市町村で軽度障害を持つ子どもたちの保育の推進に関して、技術的な面での中心的な役割を担うことが期待される中堅の保育士を対象とした「保育リーダー研修」を実施している。当初は、知多半島エリアを対象に始めた研修であったが、平成17年度からは、愛知県健康福祉部児童家庭課の協力のもとに、県下全域を対象とした。平成20年度からは名古屋市子ども青少年局子育て家庭部保育課の協力を得て名古屋市内保育園も対象とした。また、この研修の成果として、気になる子の保育方法に関する「あいち小児センター方式」にまとめあげ、現場に還元している。

◆ 活動内容

【目的】

小児保健医療総合センター保健室の調整機能と総合診療部の総合的な療育機能を活用し、気になる子を含む、障害を持つ子どもたちの理解と対応の、基本的な知識と技術について、学習する機会を提供することにより、地域で保育を進めていく上で、中核的な役割を担う保育士を養成すること。

【対象者】

愛知県内の市町村における保育所等において経度発達障害児や気になる子を健常児と共に保育する職員のうち、市町村等において推薦された保育士等30名

【研修会の方法】

5回の研修会を実施した。初回については、講義及び継続観察の進め方の説明、参加者を5グループに分けグループワークを実施した。

毎回、全体会、グループワークを行うという形態で進めた。参加者全員が自分の勤務する保育所で特定の保育・観察対象児を決め、本研修会で提案する「あいち小児センター方式」による集中的・継続的関与観察を実施した。観察対象事例については、研修会での事例検討に加えて、適宜、メールなどを利用した個別のカンファレンスを行った。

【日時、内容、参加人員】

共通テーマ「軽度発達障害児の理解と保育」

第1回 平成21年6月3日（水） 参加者 30名

- ・「あいち小児センター方式」の考え方と進め方 その1
- ・グループワーク

第2回 平成21年7月30日（木） 参加者 29名

- ・「あいち小児センター方式」の考え方と進め方 その2
- ・モデル事例の検討1
- ・グループワーク

第3章 活動別の実績とその評価

第3回 平成21年10月15日(木) 参加者 25名

- ・おさらいと保育の工夫—困った行動—
- ・モデル事例の検討2
- ・グループワーク

第4回 平成21年11月18日(水) 参加者 28名

- ・おさらいと保育の工夫
- ・モデル事例の検討3
- ・グループワーク

第5回 平成22年1月13日(水) 参加者 29名

- ・報告書の書き方について
- ・モデル事例の検討4
- ・グループワーク
- ・あいち小児センター方式についてのまとめ

【報告書の作成】

「軽度発達障害児の理解と保育」平成21年度 保育リーダー研修報告書を、230部作成し、関係機関ほかに配布した。

◆ 評価方法

研修会終了後の参加者アンケート等

◆ 評価

保育場面での「気になる子どもたち」をキーワードに研修会を半年間に渡って実施してきた。この研修は各回の研修会と平行して、1人の保育士が半年間の間、園で見ている1人の子どもを重点的に観察し援助をするということを通じて、より実践的な研修内容となっている。グループワークでは事例を通じたディスカッションしたり、援助の視点や方法の確認をおこなった。

研修後に実施したアンケートの結果 (回答率 100.0%)

項目	実数	%
あいち小児センター方式について	20	69.0
困った行動について	5	17.2
保育者の工夫	6	20.7
毎回のおさらい及びまとめ	10	34.5
研修レポートの説明および作成	3	10.3
モデル事例について	0	0.0
H20年度版保育リーダー研修報告書	13	6.9
グループワークでの話し合い (他の保育園の話・他の先生の考え方や関わり方)	15	24.1
リーダーとのやりとり (グループ内・メール・電話等)	6	24.1

研修で実施した各内容について最も参考になったものを複数選択（3つ）してもらったところ、「あいち小児センター方式について」69.0%、ついで「毎回のおさらい及びまとめ」34.5%、「グループワークでの話し合い」「リーダーとのやりとり」がそれぞれ24.1%となっていた。

広汎性発達障害の子ども達が持つ複雑な問題を、理解可能な細かな要素に分割し、援助の視点を統一化し、子どもの安心や楽しく充実した生活をするという視点で継続的に生活援助を続けるということによって子どもの変化がよく観察できるようになったり、援助のポイントを絞って関わることで保育士と子どもの間に信頼関係が育ち援助方法が段階的に変化した事例が多く報告された。受講された保育士からも今回経験した方法を用いながら他の子どもを見ていきたいという意見や園内での研修等での復命をし、他の先生との共有化をしてケース検討に利用していきたいという意見が聞かれた。こういった意見からもこの研修は保育現場での子どもの見方の一つの方法として受け入れやすいこと、1事例を継続して半年間見ていくことで子どもの変化を実感でき詳細な援助視点・方法を考え対応できる点など介入型研修として意義を果たしていると考えられる。

研修の実施方法については、研修後アンケートの結果からも、グループワークでの時間が短いなどの意見もあり研修内容、進め方について検討して実施していきたいと考える。今年度は1グループ6名としたところ、運営上大きな問題もなくできたことから次年度も同規模で実施する予定である。受講者の中には担任のクラスを持たない保育士も含まれたが、介入型研修としての意義が十分に果たせない場合が多いため、受講対象者としては再考の必要がある。

活動名

7. 生活習慣病予防活動：アチェメック健康スクール

◆ これまでの取り組み

平成13年度、協力機関のあいち健康プラザとともに、増加する子供の肥満や生活習慣病の改善のため、生活習慣病予防プログラム「アチェメック健康スクール」を企画、平成14年度、15年度は教室形式（6回1シリーズ）のプログラムを実施し生活習慣改善指導に取り組んできた。平成16年度、教室形式では参加人員に限りがあり、問題を認識したときにすぐにプログラムを開始できない点を改善し、より医療部門と連携した内容とした。個別的継続的に取り組めるよう外来診療中心のプログラムに変更、問題を意識したときに通年いつでも始められることで、参加人数の制限も緩やかでより多くの対象にアプローチが出来る体制となった。

さらに、平成17年度から、月1回計5回の外来診療の中で、参加者の生活実践記録、主治医と歯科医師、コメディカルスタッフの指導により健康的な生活習慣のあり方について親子で学ぶ教室とした。コース期間を短くし、まず生活習慣の見直しへの気づきの時間とし、参加者個々の評価は、教室のプログラム終了後の外来診療によるフォローアップを行っていくことで対応することとした。

平成20年度から、運動指導を集団ではなくプログラムの中に組み込み必要な運動量や内容を指導する形に変更した。

◆ 活動内容

1. アチェメック健康スクール（子どもの生活習慣病予防教室）

平成21年度年間参加者18人（うち、新規17人）

第3章 活動別の実績とその評価

(1) 個別指導

アチェメック健康スクール外来：毎月第2土曜日

スタッフ：内分泌代謝科医師2名、歯科医師、歯科衛生士、栄養士、作業療法士、保健師

外来回数	参加期間	実施内容
初回	0か月	身体計測、診察、歯科診察、血液検査、栄養指導、体力測定、保健指導
2回目	1か月	身体計測、診察、血液検査、腹部CT、ライフコーダ（万歩計）解析、栄養指導、運動指導、保健指導
3回目	2か月	身体計測、診察
4回目	3か月	身体計測、診察、保健指導
5回目	4か月	身体計測、診察、栄養指導、体力測定、保健指導

(2) 集団指導

実施内容	スタッフ	実施日
I 講話「健康を学ぼう」 ・対象：保護者 ・内容：子どもの肥満や健康づくり等の講話	医師、歯科医師 栄養士、保健師	5/26、8/25 12/1、2/23
II 親子で楽しく食べよう ・対象：子どもと保護者 ・内容：生活習慣病予防のための栄養教室（調理実習）、歯みがき指導	栄養士、 歯科衛生士 保健師	6/27、9/26 12/19、3/20

◆ 評価方法

- ・身体計測値（肥満度の変化）、・事前事後の問診表による状況把握
- ・生活行動変容（食生活行動の分析）、・参加後のアンケートによる感想等

◆ 評価

1. 平成21年度の参加者状況

参加者数 18人(延べ60人)うち新規参加者17人

(1) 性別 (人)

男	9
女	9
計	18

(2) 年齢 (人)

7歳	1
8歳	4
9歳	
10歳	4
11歳	3
12歳	4
13歳	1
14歳	
15歳	1
計	18

(3) 肥満度 (人)

		初回	終回
軽度	20%~30%		1
中等度	30%~50%	11	4
高度	50%~	7	1
計		18	6

(4) 結果 (人)

終了	6
継続	10
中断	2
計	18

2. スクール修了者（6人）

	性別	学年	年齢	身長(cm)		体重(kg)		肥満度		肥満度		
				初回	終回	初回	終回	初回	終回			
1	男	中1	13	153.3	156.2	65.8	65.6	52.0	高	36.8	中	↓
2	女	中3	15	176.3	174.8	93.3	91.6	58.1	高	52.6	高	↓
3	男	小4	10	134.5	137.5	43.9	44.1	42.9	中	35.5	中	↓
4	男	小3	8	135.6	138.8	42.8	44.0	36.3	中	32.1	中	↓
5	女	小6	12	150.8	152.7	64.6	64.4	49.2	中	43.4	中	↓
6	女	小6	12	154.8	156.8	65.1	60.6	45.3	中	28.4	軽	↓

(注) 高：高度肥満、中：中等度肥満、軽：軽度肥満

3. 平成21年度アチェメック健康スクール終了時のアンケート

* 対象：スクール終了者6人、回収6人

【本人】

(複数回答) (人)

I スクールに参加して以前の生活と変化したところ、保護者が気をつけるようになったこと		
1	食事の量、内容に気をつけるようになった	6
2	おやつの量に気をつけるようになった	6
3	よくかんで食べるようになった	5
4	歯磨きをきちんとするようになった	4
5	生活リズム(早寝早起き、食事の時間など)に気をつけるようになった	3
6	外遊び、運動する時間を多くした	1
7	よく歩くようになった	4
8	お手伝いをするようになった	4
9	テレビを見る時間を短くした	3
10	ゲームをする時間を短くした	2
II スクールで大変だったところ		
1	スクール全体の目標を立てる	3
2	1週間の目標を立てて感想を書く	2
3	生活チェック表を毎日書く	4
4	体重を毎日計る	0

【保護者】

I 健康スクールに参加して子どもの生活で以前と変化したところ、保護者が気をつけるようになったこと。		
	食事の量、内容に気をつけるようになった	6
	おやつの量に気をつけるようになった	4
	よくかんで食べるようになった	3
	歯磨きをきちんとするようになった	3
	生活リズム(早寝早起き、食事の時間など)に気をつけるようになった	3
	外遊び、運動する時間を多くした	1
	よく歩くようになった	4
	お手伝いをするようになった	1
	テレビを見る時間を短くした	1
	ゲームをする時間を短くした	1
II スクールで大変だったところ		
	スクール全体の目標を立てる	1
	1週間の目標を立てて感想を書く	1
	生活チェック表を毎日書く	3
	体重を毎日計る	1
	食事調査票を書く	1

第3章 活動別の実績とその評価

参考になったこと・その他意見

【講話】

- ・肥満の人のメカズムについて
- ・ゼロカロリー食品はどうできているか参考になった。
- ・太っていることの怖さを知った。

【集団指導・歯科指導】

- ・食事のバランスについて
- ・食べ方についてとても参考になった。
- ・カロリーの思い違いがかなりあった。

【全体】

- ・生活の見直しができ、運動のやり方などの指導で、知らなかったことが勉強できた。栄養をバランスよく摂っていたつもりだったが、偏りが多いことがわかったので、食生活の見直しになった。食生活や生活習慣について見直すきっかけになった。
- ・親が食べるなどと言っても、言うことを聞くこともなかったが、スクールで先生方から言われると、その時だけでもがんばろうという気持ちになったことがよかった。
- ・お医者様、スタッフの方々、多くの支えがあったことに感謝します。子どもの肥満の改善は、主に食事管理する母と、子どもだけでなく、食を共にする家族全員が認識し、協力することが大切だと思う。集団指導等の折に、例えば、同居する父親・祖父母の参加もあれば、より認識が高まり、家族の協力体制が整うのではないかと思います。科学的・視覚的に分析・解説してくれたので子どもにも（数値結果など）受け入れやすかったのではないかと思います。
- ・子ども自身に意識させることができ、とてもよかった。いろいろ検査もしていただき、健康であることが確認できた。健康スクールに通えて本当によかった。

健康になりたい子 集まれ!

アチェメック健康スクール

あいち小児保健医療総合センター、(財)愛知県健康づくり振興事業団共同企画

★参加ご希望の方は、まず講話の申込みをしてください★

講話「健康を学ぼう」

- ◆保護者の方に、健康に関する知識について 学んでいただきます。
 - ◆アチェメック健康スクールの概要も説明します。
 - ◆参加費は無料。予約してください。
- ※一般開放です。健康スクール参加者以外の方も参加していただけます!

外 来

内科診察、メディカルチェック(血液検査、運動負荷心電図・呼吸機能検査、心臓および腹部超音波検査ほか)、歯科診察、個別プログラム(栄養指導、生活習慣改善指導、体力測定等)



★保険証持参ください。
診察料、検査料等をご負担ください。

集団プログラム

親子で楽しく食べよう

- ◆栄養教室、調理実習や試食会
 - ◆歯みがき指導(親子で参加)
- ※食材費は参加者が自己負担

元気にスポーツ

- ◆親子で実践できる運動プログラム(親子で参加)
- ※参加費は無料

※集団プログラムは小学校高学年を中心に実施します。

自分でやってみよう!

栄養、運動や生活習慣について、スクール外来で学んだことを生活の中で実践しましょう。良い習慣を身に付けて、親子でチャレンジ!

専門スタッフが継続的にご相談に応じます。

ここまでのプログラムを続けたお子さまとご家族には、生活習慣病を予防できるパワーがみなぎっているはず...。主治医の先生の医学的な管理を継続して頂きながら、健康な「おとな」を目指してジャンプしましょう。

こんどは、あなたの出番です!

※検査データなどすべて主治医の先生と情報共有させていただきます。安心してプログラムにご参加下さい。

ご質問、お問い合わせはあいち小児保健医療総合センター・保健室まで。
Tel 0562-43-0500, fax 0562-43-0504, email:hoken_center@mx.achmc.pref.aichi.jp

ホップ

ステップ

ジャンプ

主治医による医学的管理

活動名	8. 生活習慣病予防活動：愛知県学童期生活習慣病対策事業
-----	------------------------------

◆ これまでの取り組み

平成 20 年度より国は生活習慣病の予防を重視する対策として成人（40～74 歳）を対象にメタボリックシンドロームに着目した「特定健康診査・特定保健指導」を医療保険者に義務づけている。しかしながら、成人期の肥満に関連した生活習慣の多くが小児期より始まっていると考えられる。小児肥満でもメタボリックシンドロームが潜在していることが指摘されている。

愛知県小児保健協会は愛知県より委託を受け、平成 20 年度より 3 年間、碧南市の小学校高学年を対象として生活習慣病予防を目的とした健康診断と健康づくり教室を実施している。平成 21 年度は、その第 2 年次となる。

◆ 活動内容

1. 対象

碧南市の平成 21 年度に小学 5 年生を迎えた児童 740 名

2. 健康診断

事業への参加の同意があった 557 名(実施は 554 名)に対し、一般の学校健診（学校保健法に基づくもの）に加え腹囲・血圧測定・血液検査等の健康診査や生活習慣アンケートを行った。

3. 健康づくりプログラムの実施

健康診断の結果をもとに対象者を抽出し、プログラムを実施した。プログラムでは、健康づくり教室を 2 回及び卒業式を実施し、集団及び個別による指導を行った。また、実践継続のために適宜紙面による支援を行った。

4. 学術活動

「小学 4 年生を対象とした生活習慣改善支援プログラム『健康へゴー！』の展開」

小田京子 2009.10.31 第 56 回日本小児保健学会

「学童を対象とした生活習慣改善支援プログラム『健康へゴー！』の展開」

小田京子 2010. 1.22 平成 21 年度愛知県公衆衛生研究会

◆ 評価方法

1. 参加者の生活改善状況

2. アンケートの分析

◆ 評価

生活改善プログラムの取り組みは 2 年目となり、昨年度の方式をもとに改善をしながら実施した。参加者は昨年度の 24.2%とほぼ同率の 15 名(26.8%)であった。学年が上がるにつれ、地域のスポーツクラブに参加する児童が増えてきたり、保護者も子どもが高学年になると仕事に出る割合も多くなり、親子そろって日にちを限定した教室への参加が難しくなってくると感じられる。昨年度のアンケートの中には「子どもだけ

の教室なら参加しやすい」という意見もあったが、この時期の児童の生活改善には保護者の理解や協力は重要と考え、親子参加の形を継続してきた。ハイリスクアプローチとしての本プログラムは意義があるが、他方で限られた日程の教室に参加できない児童にも指導が届くよう、重層的に児童全体に健康行動を促すポピュレーションアプローチの取り組みをしていくことがより効果的であると考え。（*報告書参照）

活動名	9. 生活習慣病予防活動：親子のタバコ対策活動
-----	-------------------------

◆ これまでの取り組み

子どもへの受動喫煙防止のため、平成18年10月1日から終日敷地内全面禁煙となった。平成20年3月に「子育て禁煙外来」を開設しセンター内に案内ポスターの掲示を行った

◆ 活動内容

1. 子育て禁煙外来開設の取り組み

センター内で「子育て禁煙外来」開設し、外来や各病棟へ「子育て禁煙外来」の案内ポスターを掲示した。

2. 健康教育

名古屋市内の小学校2校に対し、依頼により健康教育を実施。児童に対してクイズ形式でタバコに関する知識や受動喫煙の害について伝え、スモーカーライザーにより呼気中一酸化炭素濃度の測定など参加型、体験型の健康教育を行った。対象と内容については以下のとおりである。

学校	対象	内容
小学校	小4、5、6(120名) と保護者	喫煙予防に関する講話および個別相談
小学校	小6(96名)	タバコの害について、タバコと子どもの健康、タバコの断り方など

◆ 評価

禁煙外来を開設し、センターの外来や病棟へ案内ポスターを掲示した。禁煙外来に関する相談はあったが、いずれの禁煙外来の利用にはつながらなかった。相談では、喫煙の害や禁煙の効果、取り組み方法などの情報提供とともに具体的な禁煙外来や相談先を案内し禁煙したいという気持ちの強化につとめた。

今後とも「子育て禁煙外来」の周知を工夫したい。

活動名	10. 愛知県予防接種センター事業
-----	-------------------

◆ これまでの取り組み

平成13年11月に愛知県予防接種センターとして設置され、予防接種センター設置要領に基づき事業を展開している。接種要注意者等に対する予防接種の実施を始めとして、予防接種に関する情報の収集・提供、保健医療相談、教育研修、調査研究を実施している。接種要注意者等に対する予防接種は市町村との契約で実施し平成21年度は25市町と契約、予防接種実施件数も増加している。

◆ 活動内容

1. 接種要注意者、海外渡航者等に対する予防接種の実施

予防接種実施件数 2,809件 ※契約市町村数 25市町

2. 保健医療相談及び情報提供 相談件数 2,456件

3. 調査検討委員会の開催 調査検討委員会1回、研究部会2回

4. 学術活動

・「MR ワクチン第3期・第4期接種勧奨方法について」

小田京子 2009.7.25 第55回東海公衆衛生学術大会

◆ 評価方法

・相談件数と相談内容の分析

◆ 評価

1. 保健医療相談

(1) 相談内容は、「接種時期・方法」に関する相談が最も多く87.4%を占めた。「海外渡航」に関する相談は9.4%であった。

(2) 相談者は本人・家族が約93.4%を占めている。「基礎疾患と予防接種」、「接種スケジュール」の相談内容が多く契約市町村からの委託で実施している要注意者への予防接種の実施や相談に対応している。

(3) 新型インフルエンザの流行によりワクチン接種に関する相談が非常に多かったことが特徴的であった。ワクチンの供給がスムーズに行われず、接種対象者に基礎疾患を有する者や年齢等の優先順位が付けられたため、接種時期やスケジュールについての相談が集中し、1,200件余にのぼった。

(4) 定期接種として日本脳炎新ワクチンの接種が開始され、任意接種としてはインフルエンザ菌b型や小児用肺炎球菌、子宮頸がん予防ワクチンが導入されることとなり、新しいワクチンについての相談に対応している。

活動名	11. 遺伝相談活動
-----	------------

◆ これまでの取り組み

愛知県遺伝相談センターとして、県内の遺伝相談体制のあり方等の課題に対し、保健・医療・福祉関係機関との連絡会議を通して検討してきたが、県下に遺伝相談の体制も整ってきたことから、愛知県の遺伝相談センターの役割を昨年度で終了し、あいち小児保健医療総合センター遺伝相談としての相談事業を継続することとなった。

相談では、保健師による一次相談と専門医師カウンセラーによる遺伝相談を実施し年間50件前後の相談を実施してきた。医師を始めとした関係機関等と住民への広報活動を行い、相談ニーズに対応している。平成21年度より愛知県事業から小児センター活動に移管された。

◆ 活動内容

1. 遺伝カウンセラーによる面接相談

相談件数 10件

相談分類	主な疾患名・相談理由（複数相談あり）
次子出産への影響	いとこ婚 アスペルガー症候群 弱視 低身長 てんかん 高CPK血症 ペリツェウスメルツバッハ病 ヒルシュスプルング病 多指症合指症
家族への遺伝	アスペルガー症候群 統合失調症 難聴 脳症
遺伝子診断等	ペリツェウスメルツバッハ病
その他 (疾患、予後について)	レックリングハウゼン ハンチントン舞踏病

2. 保健師による一次相談

相談件数 19件（面接3件、電話15件、メール1件）

相談分類	主な疾患名・相談理由（複数相談あり）
次子出産への影響	いとこ婚 アスペルガー症候群 弱視 低身長 てんかん 高CPK血症 ペリツェウスメルツバッハ病 ヒルシュスプルング病 多指症合指症 色弱 難聴 脆弱性X症候群
結婚について	自閉症
家族への遺伝	アスペルガー症候群 統合失調症 難聴 脳症 色弱 親不明 精神科疾患 ダウン症
遺伝子診断等	ペリツェウスメルツバッハ病 親子鑑定
その他 (疾患、予後について)	レックリングハウゼン ハンチントン舞踏病 親子鑑定

3. 紹介経路の推移

	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
院内	6	8	9	15	19	34	31	3
市・保健所	15	15	12	9	6	5	4	3
医療機関	9	11	1	2	0	5	6	1
ホームページ	5	3	1	7	6	3	6	6
継続	11	16	8	11	15	15	12	8
その他・不明	26	22	30	12	6	3	8	8

4. 情報サービス

- ・小児センターホームページに遺伝相談実施状況について情報掲載
- ・遺伝ネットへの登録
- ・市町村・保健所・指導相談センターへ遺伝相談案内のリーフレットの配布

◆ 評価方法

- ・遺伝相談件数と紹介経路

◆ 評価

遺伝相談医師による相談件数は10件、保健師による電話相談・面接相談は19件であった。昨年より院内に遺伝相談案内のポスターを掲示したところ、それを見た相談の利用者が増加したが、本年度は、相談件数の増加はなかった。

当センター利用者には、まだニーズがあると考えられるので、今後も院内掲示や各科医師への周知を行い、院内の相談ニーズに対応していきたい。それに加え、医療連携ケースのように、地域の医療機関からの紹介による相談も受け入れていけるよう、地域の医師への周知を図り、ニーズへの対応を拡充したい。

また県民への周知も図るため、今後も引き続き保健所、保健センターや児童相談センターを通じたパンフレットの配布などの広報活動も実施したい。

本年度、遺伝相談担当医が替わり、相談も1回で終了する人が主であったが、相談内容は複雑で、継続的な相談を必要とするケースも見られる。保健師は、遺伝相談の振り分けや家族歴の聴取だけでなく、相談にこられた方の精神的な負担の軽減や疾患に対する肯定的な受け止めができるような援助を今後も担っていきたいと考えている。

活動名	12. 子どもの事故予防活動
-----	----------------

◆ これまでの取り組み

乳幼児死亡の1位は不慮の事故による死亡が、愛知県においても継続している。そこで、センター内に平成14年9月事故予防ハウスを設置し、センター見学者や受診者への事故予防教育の場として利用している。平成18年度より近隣広報に子ども事故予防教室の案内を掲載し受講者募集を実施している。

また県内2市の協力を得て事故サーベイランス事業を平成13年11月より継続実施し、不慮の事故発生状況や医療機関受診等の情報を得て2市に還元している。事故サーベイランス事業で得た情報等を利用して保健医療専門家向けの事故予防研修会や一般向けの事故予防シンポジウムを実施してきた。その他、依頼により事故予防の健康教育や事故予防啓発のためのリーフレット等の作成を実施している。

◆ 活動内容

1. 子ども事故予防ハウスの運営

事故予防ハウス利用者数	計 227名		
〈内訳〉	① 子どもの事故予防教室	6回	29名
	② 定例以外の子どもの事故予防教室		
	あいち子どもケアたすかる	7回	69名
	日進ファミリーサポートセンター	1回	12名
	③ その他		117名

2. 院外にて実施した事故予防に関する教室、研修会講師等 対象合計 98名

・すずらん保育園	1回	29名
・稲沢市生涯学習課	1回	37名
・子育てネットワーク	2回	計32名

3. ビデオ、パネルを媒介とした事故予防情報提供

- ・知多市健康・福祉フェスティバル

4. 事故体験の募集

5. 保健医療相談

昼間の保健医療相談では年間17件と非常に少なく、夜間の時間外電話相談では752件（時間外電話相談の12.2%）で、事故内訳は誤飲事故が圧倒的に多く、次いで転落事故、転倒事故が続いている。誤飲事故の内訳は食品、文具類、医薬品、プラスチックが多かった。

6. 子どもの事故サーベイランス事業（平成14年度より開始）

1) 知多市 期間：平成21年4月～平成22年3月

1歳6か月	健診受診数	801名	回収数	785名	(回収率 98.0%)
3歳児	健診受診数	841名	回収数	802名	(回収率 95.4%)

2) 碧南市 期間：平成21年4月～平成22年3月

1歳6か月	健診受診数	701名	回収数	690名	(回収率 98.4%)
3歳児	健診受診数	720名	回収数	705名	(回収率 97.9%)

知多市と碧南市の乳幼児健診を利用して子どもの事故予防事業の構築に対し連携している。内容としては

第3章 活動別の実績とその評価

事故サーベイランス事業を協同して実施している。それぞれの保健センターに情報還元を実施した。各市ではこれに基づいて、家族への啓発活動を実施している。

7. 乳幼児事故予防対策委員会への出席

◆ 評価方法

- ・ 子どもの事故予防ハウスの利用者数
- ・ 事故予防教室の開催回数と参加者数
- ・ 子どもの事故サーベイランス事業の集計状況

◆ 評価

事故予防ハウスは病院見学・教室開催時以外にも、見学希望者がいれば保健室に声をかけてもらい保健師が対応をしている。教室参加者・見学希望者の人数は少ないものの、意識の高い人が多く熱心に見学をしている。一方、子どもの事故予防に関しては全般に意識が低いのが現状である。事故予防教室は、周知方法を近隣市町の広報掲載等からの予約制としているが、今後は乳幼児の保護者に限らず、妊婦への働きかけも積極的に実施する予定である。

サーベイランス事業は3月までの集計では、事故発生場所は圧倒的に家庭内が多く、起こっている事故は1歳6か月までは誤飲、3歳までは転落、転倒が多く発達と共に事故の種類は変化していた。子どもの事故については年齢と事故が大きく関連しており、機会を捉えて情報を伝えていく必要がある。寄せられた事故体験は重傷度の高い事故につながりやすい出来事が多く、事故が誰でも起こりうるということを改めて感じさせられる機会になっている。1市ではその年齢にあった事故予防策を提示し取り組んでいるかとの質問項目を組み込んでいるが、意識づけの1つのツールと効果があるかをみていくためにも評価を重ねながら検討していく必要がある。二市で事故サーベイランス事業を実施しているが、事故予防策の検討を継続的に実施し、有効な対策を作成していきたいと考えている。事故サーベイランス事業を簡素化し、継続的な事業として実施していける形を検討したい。

次年度に向けては、子ども事故予防ハウスは開設後8年が経過しており、内容を再度見直し魅力のあるものとしていきたい。さらに院外での健康教育にも今後も積極的に対応する一方、センター内では医療部門と連携して病棟での教室の開催を検討していきたいと考えている。

また、子どもの事故と安全な環境の整備に関するツールを提供するために、専門家や地域と連携してホームページを利用した情報発信について検討していきたいと考えている。

活動名	13. ボランティア活動
-----	--------------

◆ これまでの取り組み

子どもや家族が安心して治療ができ、また生活の質の向上を目指し、療養環境を充実させる1つとしてボランティア活動を導入している。平成13年度はボランティア受入要領を策定し、8月から募集した。ボランティア委員会を設置し、センター登録者を自主グループ（バウエンプラッツ）として立ち上げ、活動も開始された。平成14年度はボランティア希望者を対象とした研修及び質の向上のため既登録者を対象とした研修を開催した。平成15年度にはボランティア希望者と既登録者の交流を図るため、交流会を含めた希望者と既登録者が一同に会した研修に形態を変えて実施した。平成16年度と平成21年度は近隣地域の社会福祉協議会に呼びかけ公開講演会を開催した。

◆ 活動内容

1. ボランティア受入状況

(1) ボランティア募集：あいち小児センターホームページにて募集、近隣社会福祉協議会等にポスターやチラシで募集

(2) ボランティア受け入れ状況

- ・登録者数：H21年度新規登録者20名、(仮登録20名)
- ・全登録者数68名
- ・団体登録数：6団体（小児の森プロジェクト・森遊隊、日本ホスピタルクラウン協会、わくわくバルーン、愛知人形劇センター・星城大学、名古屋女子大学手話サークルミルフィーユ）
- ・ボランティア活動時間：延活動者 696人、延活動時間 1412時間

2. ボランティア活動内容（Bauen Platzとしてグループ化）

- ・外来ふれあい活動：プレイコーナー活動
- ・病棟ふれあい活動：学習ボランティア、イベント
- ・環境さわやか活動：生花の活け込み、園芸、季節の飾りつけ、ミニ水族館活動
- ・こども図書活動：お話し会（月2回）
- ・どんぐりハウス：リビングの生花の活け込み
- ・事故予防ハウス：受付、説明
- ・イベント企画協力：行事へ参加

3. 団体活動

- ・アチェメックの森(小児の森)プロジェクト：年4回、森遊隊：年3回
- ・ホスピタルクラウンによる病棟訪問：月2回
- ・ぷくぷくバルーン：年8回、愛知人形劇センター：年5回
- ・星城大学：年5回（9月から）、名古屋女子大学：年5回（10月から）

4. 教育・研修

(1) 平成21年度ボランティア研修会（年3回）

第3章 活動別の実績とその評価

- ・講演（新規登録希望者と既登録者一緒に受講）
- ・交流会（新規登録希望者と既登録者の交流）
- ・初回参加者オリエンテーション；ボランティア活動内容紹介、感染症問診票にて各種感染症への注意・検診の勧め、ボランティア保険

講演内容

H21.5.9（土）わくわくチーム医療をめざして 保育士（参加者 29名）

H21.7.15（水）ボランティアとこころの健康 臨床心理士（参加者 16名）

H21.9.11（土）病棟で出会う子ども達 看護師（参加者 19名）

(2) ボランティア講演会・交流会

- ・日時：平成 21 年 9 月 12 日（土）13：30～16：30
- ・講演名「子どもたちからの贈り物」一遊びのボランティア 18 年の活動の中から一
- ・講師：NPO 法人 病気の子ども支援ネット遊びのボランティア 理事長 坂上 和子

5. 調査・研究

愛知県公衆衛生研究会

示説： あいち小児センターにおけるボランティア活動の経緯と今後の考察

6. 情報サービス

- ・ホームページにボランティア募集と研修、オリエンテーション案内の掲載
- ・地域社会福祉協議会へのボランティア募集、チラシ配布、ボランティア活動報告集「ACHEMEC の仲間たちー子どもと家族の心に安心と安らぎを」の発行

◆ 評価方法

1. 登録者数、活動時間 延活動者数、活動時間、継続者数、内容の評価
2. 自主グループ化の評価：自主グループ活動の広がり、ミニグループの組織化

◆ 評価

1. ボランティア登録者数など

平成 20 年度途中から登録の基準を変更し、「1 か月に 1 回以上の活動を 3 ヶ月実施したら本登録」としたことから、新規登録者数は平成 20 年度と比べて減少している。平成 21 年度は実活動者数は 57 人、延活動者数は 696 人で平成 20 年度に比較して延活動者数は増加している。

また活動時間も 1,412 時間、活動回数は 696 回で 20 年度と比較して増加している。活動別の時間数では、外来ふれあい活動時間数が減少し、入院中の子どもの遊び相手、学習・音楽ボランティア活動の時間数が増加している。

個別学習ボランティアの要望に対しては、個別学習ボランティアの導入・運用に関するフローチャート、学習ボランティア依頼表を病棟スタッフと共有化しコーディネートを実施した。

2. 自主グループ化について

独自のホームページを作成しイベント情報や掲示板運営などを運営センターからの連絡については B A

Uメールリストにて周知している。

baubau HP : <http://www5d.biglobe.ne.jp/~baubau/>

図書室のボランティアはメールリストを作成し、月に2回の活動にあたっての連絡等は図書ボラグループ内で行うようにしている。

3. 課題

新規登録者数は平成20年度と比べて減少しているがボランティア活動状況をみると全体回数、全体時間数は増加した。ホームページを見ての申し込みが多いためか研修参加者は若い学生が多いが、継続して活動しているのは近隣に住む中高年の方が多いことから、特にこのような対象者に届く周知方法の工夫が必要と考える。また、センターの現状からただ多くの活動を望むのではなく、外来や病棟の託児や学習ボランティア等の要請に対して応えることができる体制がとれることを1つの目標としたい。

外来プレイコーナー活動については、時間数が減少しており、曜日によりボランティアがいない時も多い。ボランティア同士がセンターで顔を合わせる機会は少なく、BAUメールリストによる連絡は実施されているが、ボランティア同士の交流については全体的にはなかなか難しい状況となっている。

今後も引き続き子ども図書ボランティア活動のように活動場所毎のグループ化を図っていき、横のつながりが出来るような支援と職員による活動時のフォロー体制が必要である。また、講演会参加のために久しぶりにセンターへ来たというボランティアがいたり、いろいろと勉強したいという意見も出たこともあり、年に1~2回は勉強会を兼ねた交流会を開催するなどしていきたい。

外来を受診する子どもや家族から、ボランティアがいることによる安心感、療養環境改善への感謝の声が届いている。ボランティアがやりがいを持って継続的に活動できるようにセンターとボランティアとの連絡をスムーズに図っていくことや職員へのボランティア活動への理解を深めるために努力する必要があると思われる。

活動名	14. 国際母子保健医療活動
-----	----------------

◆ これまでの取り組み

国際母子保健医療活動として、当センターでは、JICA（独立行政法人国際協力機構）中部国際センターにおいて平成13年度新規の研修コースとして設立された「アフリカ地域母子保健行政コース」ならびにアフリカ地域国別研修「地域母子保健」コースに対して設立当初から関わり、プログラム企画立案から、募集要項案作成への助言、研修対象者の選定、研修指導評価等技術協力、当センターで実施する講義の会場設営や連絡調整の役割を担ってきた。平成19年度まで7回にわたって実施してきた。

研修員の評価では、プログラム等の完成度が高く、研修員の高い満足度が得られた。最終年度に特に好評であったプログラムは、①アクションプラン作成指導②JOICEP 思春期のリプロダクティブヘルスで、ロールプレイで問題を具体化し、実際の問題解決への道筋をみつける形で、アフリカの事情に精通した講師陣からの適切なアドバイスがあり、活発な意見交換がされた。また感染症対策については、研修員の関心が高く、特にサーベイランスシステムの運用状況が参考になったとの意見が合った。愛知県の母子保健対策についての講座では、家庭訪問が研修員の国のアウチリーチプログラムと似ていることから質問が集中。未熟児の家庭訪問については、多くの研修員が自国で実践したいと好評であった。途上国での学校保健活動の実践

第3章 活動別の実績とその評価

についてのテーマで行われた、研修員同士のディスカッションが有意義であったとの評価であった。

名古屋大学のヤング・リーダーズ・プログラムに対しては、平成16年度から同プログラムで1年間留学中の研修員に対する講義を毎年担当してきた。そのほか、これまでに当センターは国立国際協力医療センターやJICAプロジェクトのカウンターパート研修員研修を受け入れるなど、日本の小児医療保健に関する講義や当センターの活動概要等についての紹介をしている。

◆ 活動内容

1. ヤング・リーダーズ・プログラム

(名古屋大学大学院医学系研究科・医療行政修士コース 留学生)

平成21年6月9日(火)～6月13日(金)、研修生14名

〔研修内容〕当センターの診療科(腎臓科、整形外科、心療科、循環器科、内分泌代謝科、アレルギー科、小児外科、耳鼻咽喉科、泌尿器科)について、日本の小児保健、保健師の活動、大府養護学校との交流

活動名	15. 国際学校保健活動
-----	--------------

◆ これまでの取り組み

【集団研修「学校保健」コース設置の経緯と当センターの実績】

途上国では学校保健(保健室の併設、衛生教育・HIV/AIDS教育等の実施、子どもの健康管理、安全な水の確保、学校給食等)に対する関心は高いものの、その実施は十分ではない。独立行政法人国際協力機構(JICA)で実施している途上国の関係者を日本に招き、わが国の技術や手法を研修して自国の発展に寄与するいわゆる“本邦研修”の一つとして、平成18年度より集団研修「学校保健」コースを新設し、その企画・実施を当センターに依頼した。このコースでは、学習環境を改善することで、子どもの健康を確保し、就学率の拡大と中退者の防止を図ることを最終的な目標としている。アジア、アフリカ、大洋州、中米の国々から平成18年度は12名、平成19年度は13名、平成20年度は15名の研修員を向かえて研修を実施するとともに、国際研修を契機に当センターと教育機関とのより具体的な連携を目指した活動に取り組んできた。

【JICA技術協力プロジェクトへの協力】

2008年12月から開始されたJICAのエジプト国に対する学校保健プロジェクト(The Project on the Promotion of School Health Service in Upper Egypt)の専門家チームの一員として同国に派遣されて活動している。第1回目派遣は2008年12月28日～2009年1月6日、第2回目派遣は2009年2月16日～3月7日であった。

◆ 活動内容

1. JICA課題別研修事業：平成21年度集団研修「学校保健」コースの実施

(1) コース名

和文：平成21年度(第4回)課題別 集団研修「学校保健」コース

英文：School Health, Fiscal Year 2009

(2) 研修期間：2009年5月17日(月)から2007年7月4日(土)まで

(3) 研修員と参加国(11か国14名)

ベナン、カメルーン、コートジボワール、エジプト（2名）、ガーナ、グアテマラ、ケニア、ラオス（2名）、ネパール（2名）、南アフリカ、ザンビア

(4) コース目標

日本の学校保健制度や学校における取り組みを理解し、自国の学校保健システム改善に資する政策・制度・改善に係る示唆を得て、自国内の関係者に普及させることを目的とする。

到達目標（研修の成果）

- ① 学校保健の現状認識 - 自国の学校保健に係る問題点・課題を明確化する。
- ② 現場体験に基づいた学校保健の考察 - 日本の実例を参考にしながら、学校保健システムの改善方法について、自国の状況に即して考察する。
- ③ 学校保健システム構築への展望 - 自国における学校保健システムの改善に資する政策・制度・実践計画の策定に係る方向性・知識の普及方法を設定する。
- ④ 学校保健の普及活動 - 研修で学んだことやアクションプランについて、自国で普及活動を行う。

(5) 実施日程：下表参照

(6) 県内の学校保健関係者との連携強化

研修カリキュラムの設定にあたっては、以下の機関の協力を得た。

- ・ 県内行政機関；愛知県教育委員会健康学習課、愛知県教育委員会体育スポーツ課、愛知県健康福祉部健康対策課、愛知県精神保健福祉センター
- ・ 県内教育機関；愛知県総合教育センター、愛知教育大学教育学部教育科学系養護教育講座、名古屋学芸大学ヒューマンケア学部、愛知学院大学歯学部
- ・ 県内学校現場；阿久比町立英比小学校、西尾市立西尾小学校、豊川市立代田小学校、東浦町立片葩小学校、長久手南小学校、岩倉市立岩倉南小学校、一宮市立朝日西小学校、西尾市立寺津小学校、愛知県立大府養護学校、愛知県立ひいらぎ養護学校
- ・ 県内その他機関；愛知県医師会、犬山市子ども未来課子育て支援センター、愛知県半田保健所、愛知県健康づくり振興事業団
- ・ 県外関係機関；文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課東京大学大学院教育学研究科、東京大学大学院教育学研究科、帝京平成大学現代ライフ学部児童学科、岐阜大学地域科学部、岐阜聖徳学園大学短期大学部幼児教育学科、財)予防医学事業中央会・財)日本寄生虫予防会、ジョイセフ（家族計画国際協力財団）、広島県西部保健所保健課、多治見市立市之倉小学校

平成21年度 JICA 課題別研修事業「学校保健」コース研修日程

月日	形態	モジュール	研修内容	講師	研修場所
5/17	日		来日		
5/18	月		ブリーフィング		JICA 大阪
5/19	火		移動		-
5/19	火	オリ	生活オリエンテーション		JICA 中部
5/20	水	オリ	開講式・プログラム/コースオリエンテーション		JICA 中部
5/20	水	講義	日本語		JICA 中部
5/21	木	講義	Module 1 Project Cycle Management : Participation analysis, Problem analysis	熱田 泉	JICA 中部
5/21	木	講義	Module 1 Project Cycle Management : Participation analysis, Problem analysis	熱田 泉	JICA 中部

第3章 活動別の実績とその評価

5/22	金	講義	Module 2-1	日本の学校保健システム	高山 研	JICA 中部
5/22	金	講義	Module 2-1	日本の学校教育制度	横田 雅史	JICA 中部
5/25	月	講義	Module 2-1	日本の小児保健医療の成果と現状	長嶋 正實	JICA 中部
5/25	月	討論	Module 1	ケーススタディ：participation tree1 作成	山崎 嘉久	JICA 中部
5/26	火	講義	Module 2-2	日本の養護教諭と保健室（その目的と機能）	近藤 真庸	JICA 中部
5/26	火	講義	Module 2-1	学校環境衛生と薬剤師業務	鈴木 晴雅	JICA 中部
5/27	水	講義	Module 2-1	地方教育行政	川合 貴也	JICA 中部
5/27	水	討論	Module 1	ケーススタディ：participation tree2 作成	山崎 嘉久	JICA 中部
5/28	木	討論	Module 1	ケーススタディ：participation tree3 作成	山崎 嘉久	JICA 中部
5/28	木	講義	Module 2-1	日本の学校医制度 / 学校保健委員会 / 先進国の学校保健	衛藤 隆	JICA 中部
5/30	土	討論	Module 1	インセプションレポート報告会（国際学校保健セミナー）		ウイルあいち
5/30	土	討論	Module 1	インセプションレポート報告会（国際学校保健セミナー）		ウイルあいち
6/1	月	討論	Module 1	ケーススタディ：problems trees & objectives trees 作成1	山崎 嘉久	JICA 中部
6/1	月	討論	Module 1	ケーススタディ：problems trees & objectives trees 作成2	山崎 嘉久	JICA 中部
6/2	火	討論	Module 1	ケーススタディ：problems trees & objectives trees 作成3	山崎 嘉久	JICA 中部
6/2	火	講義	Module 2-2	日本の学校検診システム	長嶋 正實	JICA 中部
6/3	水	講義	Module 2-3	日本の結核対策	増井 恒夫	JICA 中部
6/3	水	講義・視察	Module 2-2	現職教員研修（一般・養護教諭）	安藤 誠	愛知県総合教育センター
6/4	木	講義	Module 2-2	学校検診における学校医の役割	稲坂 博	JICA 中部
6/4	木	講義	Module 2-2	学校検診の運営と学校保健統計	鳴澤 由紀子	JICA 中部
6/5	金	講義	Module 2-2	歴史：養護訓導から養護教諭へ/養護教諭養成過程	堀内 久美子	JICA 中部
6/5	金	討論	Module 1	ケーススタディ：problems trees & objectives trees 作成4	山崎 嘉久	JICA 中部
6/8	月	視察	Module 2-2	児童・生徒への個別の保健指導		英比小学校
		視察	Module 2-2	児童・生徒への個別の保健指導		西尾小学校
		視察	Module 2-2	児童・生徒への個別の保健指導		代田小学校
6/9	火	講義・視察	Module 2-2	健康観察 / 救急処置	藤井 千恵	愛知教育大学
6/9	火	討論	Module 2-2	次世代を担う者たちへ：養護教諭教育課程の学生との討論	藤井 千恵	愛知教育大学
6/10	水	討論	Module 1	ケーススタディ：problems trees & objectives trees 作成5	山崎 嘉久	JICA 中部
6/10	水	視察・講義	Module 2-3	地域との交流による保健学習	鈴木 園枝	犬山市子育て支援センター
6/11	木			移動		
6/11	木	視察・講義	Module 2-3	保健専門家による保健教育とその手法 ~Reproductive health education	浅村 里紗	ジョイセフ
6/12	金	討論	Module 2-3	JICA 学校保健関連プロジェクト	竹内 智子	JICA 本部
6/12	金	講義	Module 2-3	日本の寄生虫対策	山内 邦昭	日本寄生虫予防会
6/15	月	講義	Module 2-3	スクールカウンセラー・不登校	海野 千歌子	JICA 中部
6/15	月	討論	Module 1	ケーススタディ：problems trees & objectives trees 作成6	山崎 嘉久	JICA 中部
6/16	火	講義	Module 3	Project Cycle Management: PDM	熱田 泉	JICA 中部
6/16	火	講義	Module 3	Project Cycle Management: Monitoring & Evaluation	熱田 泉	JICA 中部

6/17	水	討論	Module 3	アクションプラン作成指導：PDM を用いた討論 1	山崎 嘉久	JICA 中部
6/17	水	討論	Module 2-2	研修企画の実際	安藤 誠	JICA 中部
					中村恵美子	JICA 中部
6/18	木	講義	Module 2-3	体育授業		長久手南小学校
6/18	木	視察	Module 2-3	教科としての体育活動概論	山田 滋生	JICA 中部
6/19	金	講義	Module 2-3	教育専門家による保健学習の指導法と実際	近藤 真庸	JICA 中部
6/19	金	講義	Module 2-3	教育専門家による保健学習の指導法と実際（授業体験）	近藤 真庸	JICA 中部
6/22	月	講義	Module 2-3	保健学習の教材	山下 晋	JICA 中部
6/22	月	講義・視察	Module 2-3	健康推進学校における保健活動、保健集会		岩倉南小学校
6/23	火	視察・講義	Module 2-3	学級担任による保健学習	矢野 智	市之倉小学校
6/23	火	講義	Module 2-3	学級担任による保健学習	中垣 晴男	JICA 中部
6/24	水	視察・交流	Module 2-3	学校でのフッ素洗口	横田	朝日西小学校
6/24	水	講義	Module 2-3	学校保健における歯科医の役割・学校歯科検診	井後 純子	朝日西小学校
6/24	水	討論	Module 3	アクションプラン作成指導：PDM を用いた討論 2	山崎 嘉久	JICA 中部
6/25	木	講義	Module 2-3	日本の学校給食システム	榎本 美晴	西尾市
6/25	木	視察	Module 2-3	学校給食の現場での運用		西尾市
6/26	金	講義	Module 3	途上国での学校保健活動の実際（プラン作成の困難さ）	野澤 幸江	JICA 中部
6/26	金	討論	Module 3	アクションプラン作成指導：PDM を用いた討論 3	山崎 嘉久	JICA 中部
6/29	月	視察	Module 2-3	養護学校での学校保健活動 (知的障害・肢体不自由等)	三輪 りな子	愛知県立ひいらぎ養護学 校
6/29	月	討論	Module 3	アクションプラン作成指導：PDM を用いた討論 4	山崎 嘉久	JICA 中部
6/30	火	視察	Module 2-3	保健学習の教材	金子 智隆	あいち健康プラザ
6/30	火	講義・視察	Module 2-3	特別支援学校（病弱養護学校）と特別支援教育	松井 利幸	大府養護学校
7/1	水	演習	Module 3	アクションプラン準備		JICA 中部
7/1	水	演習	Module 3	アクションプラン準備		JICA 中部
7/2	木	討論	Module 3	アクションプラン発表会		JICA 中部
7/2	木	討論	Module 3	アクションプラン発表会		JICA 中部
7/3	金			評価会・閉講式・歓送会		JICA 中部
7/4	土			帰国		

2. 国際学校保健セミナーの開催

2009年5月30日（土）10：00～16：00

あいち小児保健医療総合センター 地下大会議室

上記研修コースのジョブレポート報告会を兼ねた公開セミナーで、各国の学校保健の現状について報告された。同研修コースの講師などの専門家（医師、歯科医師、保健師、教員ほか）や、県内の学校で学校保健に従事している養護教諭、さらに愛知教育大学養護教育過程の学生など 66 名が参加し、有意義な討論や質疑応答が行われた。

第3章 活動別の実績とその評価

3. JICA 国別研修事業：平成 21 年度国別研修「学校保健」コースの実施

(1) コース名

和文：国別研修 学校保健

英文：Country Focused Training Course "School Health"

(2) 研修期間：2009 年 9 月 23 日（金）から 10 月 9 日（金）まで

(3) 研修員と参加国（2 か国 4 名）

エジプト（2 名）、ラオス（2 名）

(4) 研修実施の背景

エジプトでは学校保健（保健室の併設、衛生教育・HIV/AIDS 教育等の実施、子どもの健康管理、安全な水の確保、学校給食等）の取り組みが十分でなく、子どもの健康が脅かされている。一方、日本では、学校保健法等の制度整備、養護教諭等の人材育成、保健室等設備の整備、家庭や地域との連携により、子どもの保健管理と保健教育が行われており、子どもの健康の保持増進と学習環境整備に努めてきた。近年、各国でも学校保健に関する関心が高まり、さまざま取り組みも始まってきた。研修を通し、こうした各国の情報や経験を共有することは、自国により適した学校保健システムの構築に向けて大変有効である。

エジプト・ラオスの実情に即した研修を実施するため、平成 21 年度より国別研修を新設することとなった。本年度はその 1 回目となる。

(5) コース目標

学習環境を改善することにより、子供の健康を確保し、就学率の拡大と中退者の防止を図ることを最終的な目標とする。

(6) 実施日程：下表参照

(7) 県内の学校保健関係者との連携強化

研修カリキュラムの設定にあたっては、以下の機関の協力を得た。

- ・ 県内行政機関；愛知県教育委員会健康学習課、愛知県精神保健福祉センター
- ・ 県内教育機関；愛知県総合教育センター、愛知教育大学教育学部教育科学系養護教育講座、
- ・ 県内学校現場；吉良町立津平小学校、春日井市立不二小学校、豊橋市立芦原小学校
- ・ 県外関係機関；文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課東京大学大学院教育学研究科、東京大学大学院教育学研究科、大阪大学帝京平成大学現代ライフ学部児童学科、岐阜大学地域科学部、

平成 21 年度 JICA 国別（エジプト・ラオス）研修事業「学校保健」コース研修日程

月日	形態	研修内容	講師	研修場所
9/23	水	来日		
9/24	木	ブリーフィング		JICA 研究所
9/24	木	コースオリエンテーション	山崎 嘉久	JICA 研究所
9/24	木	討論	各国と日本の学校保健の状況	山崎 嘉久 JICA 研究所
9/25	金	講義	日本の学校保健システム	高山 研 JICA 研究所
9/25	金	講義	日本の学校医制度 / 学校保健委員会 / 先進国の学校保健	衛藤 隆 JICA 研究所
9/28	月	プログラムオリエンテーション		JICA 中部
9/28	月	講義	日本の養護教諭と保健室（その目的と機能）	近藤 真庸 JICA 中部
9/28	月	講義	教育専門家による保健学習の指導法と実際	近藤 真庸 JICA 中部

9/29	火	講義	Project Cycle Management	熱田 泉	JICA 中部
9/29	火	講義	Project Cycle Management	熱田 泉	JICA 中部
9/30	水	講義・視察	健康推進学校における保健活動、保健集会	村松 弘三	津平小学校
9/30	水	講義・視察	現職教員研修（一般・養護教諭）	安藤 誠	愛知県総合教育センター
10/1	木	講義・視察	健康観察 / 救急処置	藤井 千恵	愛知教育大学
10/1	木	講義	日本の学校教育制度	横田 雅史	JICA 中部
10/2	金	講義	学校保健と母子保健の連携	中村 安秀	大阪大学
10/5	月	講義	日本の学校給食システム	榎本 美晴	不二小学校
10/5	月	視察	学校給食の現場での運用	野田 晴義	不二小学校
10/6	火	講義	日本の結核対策	増井 恒夫	JICA 中部
10/6	火	視察	児童による学校保健委員会活動	根木 真太郎	芦原小学校
10/7	水	講義	日本の学校検診システム	山崎 嘉久	JICA 中部
10/8	木	討論	JICA 学校保健関連プロジェクト	竹内 智子	JICA 本部
10/8	木		修了書授与・レポート発表・評価会		JICA 本部
10/9	金		帰国		

4. JICA-net 遠隔技術協力パイロット事業によるプロGRESS報告会

課題別研修「学校保健」コースでは、研修中にアクションプランを作成するとともに、研修の実効性を高め全体的な成果を確認するため、帰国後の短期的な活動状況を、プロGRESSレポートとして提出することを研修員に課している。今回、研修員がそれぞれの組織に戻り、アクションプランを実行する際に直面した課題に対するサポートとして、JICA-Net の遠隔技術を利用し帰国研修員のフォローアップに焦点を絞ったプロGRESS報告会が実施した。

- ・実施日時：2010年2月10日（水） 18:00～21:00
- ・参加国と参加者：エジプト、ガーナ、ラオス、カメルーン、ネパールの帰国研修生と関係者 44名



JICA 中部国際センター



エジプト事務所



ラオス事務所



ガーナ事務所



カメルーン事務所

テレビ会議システム（JICA-net）を利用した報告会の様子
 (http://jica-net.jica.go.jp/ja2/topics/topics_100324.html)

第3章 活動別の実績とその評価

研修員が帰国した後の各国の学校保健活動の状況は以下の通りであった。

エジプト：JICA プロジェクト対象校での学校健診、健康教育（学校看護師による栄養、禁煙、新型インフルエンザなど）、Internal school health committee の組織化、学校医や学校看護師への研修、学校環境衛生の定期的な監視、新型インフルエンザ対策として新規の給水タンクの学校への配備などが実施された。

ラオス：2名の研修員が協力して、モデル校で生徒と教師を対象とした 1.手洗いを中心とした personal hygien、2.歯磨きなど歯科保健に関する健康教育を実施した。

ガーナ：SHEP に所属している以前の研修員 2 名が協力して、モデル校に日本の保健室のコンセプトを取り入れた学校保健の現場活動拠点を設置した。今年度の研修員アクションプラン（学校給食の調理員の質の向上）の進捗では、調理員の現場研修、献立表の作成、生徒による配膳などが実施されている。

カメルーン：教育省の上司など関係者に対する研修報告、アクションプラン（モデルとなる保健室の設置と教員養成学校で、日本の養護教諭に倣った学校保健の実施担当者の教育カリキュラムの策定）の進捗では、保健室を設置する学校と空き教室の選定を行った。

ネパール：保健省、教育省の関係者への報告会の実施、貧血予防としての寄生虫対策に関する保護者と生徒への研修、および駆虫薬配布。学校での健康教育に関するキャンペーン、栄養に関する冊子の作成などが実施されている。

プロGRESS報告会では、各国の組織において、アクションプランがどのような活動に導入され、どのように実行されているかとともに、それに際しての課題が報告された。また、自国における経験やアイデアが発表された。山崎はコースリーダーの立場から、今後のアクションプランの進め方についてアドバイスした。

5. JICA 技術協力プロジェクト専門家チーム（学校保健）への協力

平成 20 年度から開始されたエジプト国に対する JICA 技術協力プロジェクト The Project on the Promotion of School Health Service in Upper Egypt の専門家チームの一員として、山崎保健室長が派遣された。

1) 第3回目派遣：平成 21 年 7 月 14 日～平成 21 年 8 月 8 日

ファユーム県タメイヤ郡のプロジェクト対象地域の保健省、健康保険庁、教育省の関係者、パイロット校 20 校の学校医、学校看護師、校長、教師、ソーシャルワーカーなどの学校保健委員会メンバーに対してワークショップなどを実施した。その成果として学校保健活動実践マニュアル、学校保健活動モニタリングガイドライン、活動カレンダー他を作成した。

【作業日程】

7月15日（水）ドバイ経由で15日夜にカイロ国際空港着。

7月16日（木）Second Workshop for Development of Manuals for Implementation and Monitoring of School Health（第3日目） 場所：Fayoum Urban Health Center Meeting Room

学校保健実践マニュアル作成のための Taskforce Team1～5 のメンバー40名が参加して実施。4つのTFのテーマは以下のとおりである。

TF1. 「Health education」 ①Prevention from Anemia,②Avoid Smoking,③Avoid TB.

TF2. 「Family and community participation」 ①Organize and hold school camps for keeping the environment,②Give members of the Board Of Trustees a bigger role over the street sellers,③Organize and make trips for the school students

TF3. 「School environment」 ①Find a clean safe school playground,②Find a healthy suitable school

canteen,③Provide a healthy school environment

TF4.「Water and sanitation」①Provide cleansing materials of cleaners and waste baskets, ②Regular maintenance for the water taps, toilettes and water tanks,③Education by means of instructional posters, periodical monthly wall magazines, dramas and poems.

7月18日(土) 団内調整会議

Taskforce 5 (Health care service) のワークショップの運営について、パイロット校 20 校のワークショップの運営についてアクションプランに基づいた、マニュアル記載項目の実施計画作成

7月19日(日) JICA エジプト事務所訪問: エジプト事務所長井黒伸宏氏、小森次長、プロジェクト担当者鶴岡氏に対して、プロジェクト進捗状況の報告。午後ファユームに移動

7月20日(月) ~22日(水) First Workshop for Development of Manuals for Implementation and Monitoring of School Health (Taskforce 5: Health Care Services)

Tammia District Hospital Meeting Room にて、Healthcare service をテーマとした Taskforce Team 5 の第1回目の workshop。10名のメンバーによる討論の結果、学校保健活動実践マニュアルに掲載する活動内容は①Medical equipment and consumables for the school clinic、②Comprehensive Medical Examination、③First Aid

7月28日(火) ~29日(水) Follow Up Workshop of School Action Plans for 20 Pilot Schools

Fayoum Club にて、パイロット校 20 校の校内保健委員会のメンバーによるグループ討論と次年度(2009年9月~2010年6月)の活動計画プラン作成のための workshop を開催した。

7月30日(木) ~8月1日(土) カイロ ホテルフラメンコ会議室

エジプトの休日である金、土も返上して団内調整会議を行い、最後の Taskforce team による workshop の内容の確定、機材供与、学校保健実践マニュアル、モニタリングガイドラインの骨子作りなどの作業を実施した。

8月2日(日) El Rodda School for boys 学校保健委員会メンバーとの会合

8月3日(月) ~5日(水) Third Workshop for Development of Manuals for Implementation and Monitoring of School Health (TF 1,2,3,4) Second workshop for Development of Manuals for Implementation and Monitoring of School Health (TF 5) Fayoum Urban Health Center Meeting Room にて Taskforce team 約 50 名が参加して実施。

山崎から日本の学校現場で行われている健康教育についての紹介。学校でのカリキュラム(学習要綱)や、様々な授業の方法(養護教諭とクラス担任が合同で実施、生徒による発表、Child to Child など)を PPT にて説明。日本の健康教育カリキュラムおよび授業案を例として提示。それらのアイデアを元に各タスクフォースで、健康教育の対象者および内容を示してもらい、さらにその中から 1 つのテーマを選び、授業案に準ずるものを作成してもらった。

行政側モニタリングを検討するに当たり、モニタリングサイクルについて山崎より PPT にて説明。ワークシートに従って、各タスクフォースグループにて作業を行った。ワークシートは、①各テーマでのモニタリングの目的、責任主体、モニタリングすべきデータの内容および収集方法と分析方法について。②その分析結果を踏まえ、各省庁(MOH/HIO/MOE)でどのように活用していくのか、という事について考えてもらうものとした。Monitoring guideline の開発として HIO の Health visitor の Supervisor、MOE の Supervisor が中心となり各学校のデータを集め、それを HIO が分析、結果を MOH と MOE に提供。MOE が各学校へ結果を伝えるというフローが出来あがった。

第3章 活動別の実績とその評価

8月6日(木) 供与機材の事前チェック

パイロット校20校の school clinic に供与する備品(机ほか)や医療機材(体温計、救急箱、聴診器、血圧計、視力測定盤ほか)について、カイロの備蓄倉庫でひとつひとつ注文と一致しているか、壊れていないかなどのチェックを行った。

8月7日(金) 午後カイロ発、ドバイ経由にて8日(土)夜帰国

2) 第4回目派遣:平成22年2月13日~平成22年2月28日

エジプトの学校保健活動に応用可能な健康教育の手法と教材の開発を目的とした参加型のワークショップおよび学校健診に関する学校現場での実地研修を実施した。健康教育と学校健診の手法、および対象地域における学校保健活動などをまとめた3本のDVDを作成した。

【作業日程】

2月14日(日) ドバイ経由で夜にカイロ国際空港着。

2月15日(月)~2月17日(水) 健康教育ワークショップ (Fayoum club, Fayoum)

エジプトの学校保健活動に応用可能な健康教育の手法と教材の開発を目的とした参加型のワークショップ。Tammia のパイロット校20校の学校保健担当者(学校看護師、ソーシャルワーカー、教師など)のべ190名、HIO (Cairo, Fayoum, Tammia)、MOH (Cairo, Fayoum)、MOE (Tammia) のカウンターパートのべ49名が参加し、森川氏のファシリテーションで実施された。最終日には学校ごとに関係者が協力して、学校保健活動に関連したドラマや歌、ポスターなどを発表した。Dr. Hussein を始め、Cairo のカウンターパートなども、活発で内容的にも充実した発表を高く評価していた。

山崎は家庭で実践できる健康教育の一例として、日本の3歳児健診で用いられている指擦りによる簡易聴力検査を紹介した。親(検査者)と子ども(被験者)に分かれて検査を体験した参加者は、初めての体験で高い関心を示した。また、昨年春に本邦研修に参加した Dr. Mohsen (HIO, Fayoum)、Dr. Doaa (MOH, Fayoum) とともに、日本の学校現場で利用されている健康教育教材についてプレゼンした。

2月18日(木) Rodda 小学校の Internal School Health Committee 会議の視察

校長先生がリーダーとなり、教師の司会で、学校看護師、ソーシャルワーカー、親代表4名と子ども代表5名が参加した。Rodda 校では、プロジェクトが始まってから定期的に開催しているようで、議事録も残っていた。廊下の階段に、愛知県の芦原小学校と交換しているニュースレターが掲示されていた。

2月20日(土) 学校健診モデル開発のための企画会議 (Auberge Hotel, Helwan)

Abo Taleb BE school で実施する学校健診モデルの企画会議を Dr. Mohsen、Dr. Doaa、Dr. Farag (HIO, Tammia) と Dr. Asmaa が参加して行った。日本の学校健診で用いられている「定期健康診断保健調査票」に倣った Questionnaire for parents sheet (健診前に子どもの健康状況を把握する問診票)の質問項目と質問用紙のフォーマット、生徒一人一人の個別データを記録する indivisual health card について、原案を作成し practicum に備えた。また、Tammia の小学校で問題になっている慢性疾患について議論し、(鉄欠乏性)貧血、リウマチ性心臓疾患、寄生虫疾患が健診でもスクリーニング可能な疾病として挙げられた。これら3疾患について、practicum 当日にモデルケースとして提示することとした。

2月21日(日)~22日(月) 準備作業、記録整理、団内会議

2月23日(火)~24日(水) Field Practicum Abo Taleb BE School (Tammia)

2009年秋にFayoumで実施された学校医・学校看護師を対象にした研修、学校保健サービス研修ニーズ把握の結果から、エジプト国においては、学校健診の手技、データ管理についてより具体的な技術指導が必

要との判断にいたった。このため日本の学校保健の経験に基づいた健康診断帳票類の開発ならびに学校医、学校看護師を対象とした現場実習を行った。

実習には Abo Taleb 校の学校医 (Dr. Sameh)、学校看護師 (Ms. Nagat)、Health visitor supervisor 2 名 (Ms. Amal and Ms. Sanaa)、Dr. Mohsen、Dr. Doaa、Dr. Farag が参加し、健診に必要な帳票を開発した。学校看護師が行う身体計測、視力測定の実技、学校医の診察の際の学校医、学校看護師、教師の役割分担、学校医の診察により経過観察、要精検、要治療など referral level を決定することなどを実習した。

2月25日(木) 学校間交流 (World Trade Center, Cairo)

Rodda 校の ISHC の 5 名の子ども (3~6 年生) と愛知県豊橋市立芦原小学校の保健委員会の子ども (5,6 年生) との JICA テレビ会議システムを利用した交流会議。2009 年の秋からニュースレターを交換して学校の日課や学校保健活動を紹介した。エジプトと日本の体格の大きな違いがたいへん興味深かった。

2月27日(土) 上エジプト地域への普及ワークショップ準備会合 (MOH, Cairo)

Dr. Hussein (MOH, Fayoum)、Dr. Sarah (HIO, Fayoum)、Dr. Nagwa (MOH, Cairo)、Dr. Omayma (HIO, Cairo) および Dr. Asmaa と JICA 専門家チームとで次週に予定されている普及ワークショップの内容、参加者、ロジ等を議題として話し合った。

2月27日(金) 午後カイロ発、ドバイ経由にて 28日(土) 夜帰国

◆ 評価方法

1. 課題別研修「学校保健」コースに対する評価：研修中より研修の単元の終了ごとに研修員に質問紙に記入を求めた。また、帰国後の活動に関する質問紙は研修終了時に記入を求め、スケールによる評価を行った。
2. JICA-net 遠隔技術協力によるフォローアップ報告会：JICA-net メンバーが対象国に派遣され、現地で帰国研修員、学校保健関係者等に聞き取り調査を実施した。

◆ 評価

1. 課題別研修「学校保健」コースに対する評価

・ 単元目標の達成度 (研修員 14 名による自己評価)

←Fully Achieved Unachieved→

	単元名	4	3	2	1	無回答
Module 1	自国の学校保健の現状認識	6	8			
Module 2-1	日本の学校保健：概論	10	4			
Module 2-2	日本の学校保健：養護教諭とその活動	12	2			
Module 2-3	日本の学校保健：各論	10	4			
Module 3-3	自国の学校保健システム構築への展望	10	4			

・ 講座内容の重要度 (研修員 14 名による評価)

←Very important Not important→

	単元名	4	3	2	1	無回答
Module 1	自国の学校保健の現状認識	11	3			
Module 2-1	日本の学校保健：概論	11	3			
Module 2-2	日本の学校保健：養護教諭とその活動	13	1			
Module 2-3	日本の学校保健：各論	12	2			
Module 3-3	自国の学校保健システム構築への展望	12	2			

第3章 活動別の実績とその評価

・講義内容について（研修員 14 名による評価）

←Very good Poor→

	単元名	4	3	2	1	無回答
Module 1	自国の学校保健の現状認識	12	2			
Module 2-1	日本の学校保健：概論	10	4			
Module 2-2	日本の学校保健：養護教諭とその活動	11	3			
Module 2-3	日本の学校保健：各論	11	3			
Module 3-3	自国の学校保健システム構築への展望	10	4			

・講義テキストや教材の満足度（研修員 14 名による評価）

←Very much Not at all→

	単元名	4	3	2	1	無回答
Module 1	自国の学校保健の現状認識	12	2			
Module 2-1	日本の学校保健：概論	10	4			
Module 2-2	日本の学校保健：養護教諭とその活動	11	3			
Module 2-3	日本の学校保健：各論	11	3			
Module 3-3	自国の学校保健システム構築への展望	10	4			

2. 帰国後の研修内容の活用について

「研修の成果を帰国後活用するのは易しいですか？」の質問対しては、4(Yes, very easy):4名、3(easy):9名、2(difficult):1名、1(NO, very difficult):0名であった。

活用することが容易と感ずる理由について選択肢を用いて strongly agree から disagree までの4段階のスケールで回答を求めると、A: 自分が意思決定の権限を有しているため 4:1名、3:9名、2:1名、1:0名、B: 研修の目的・内容と組織の方針とが合致しているため 4:7名、3:5名、2:0名、1:1名、C: 活用するうえで必要となる予算の確保が容易なため 4:1名、3:5名、2:2名、1:0名、D: 同僚の理解と協力を得ることが容易なため 4:10名、3:1名、2:0名、1:1名、E: 日本の経験が自国の状況と近いため 4:3名、3:2名、2:3名、1:2名となった。その他の自由記述の意見では、-I will replicate the skills and knowledge in my country. -Health service is done by school health nurses of DOH in my country, thus Japan's practice will be shared with my colleagues. -My country is starting school sector reform, so school health can be included in one sub sector and it will be a big achievement. などが記述されていた。

一方活用が困難を感ずる理由は、A: 自分が意思決定の権限を有していないため 4:1名、3:2名、2:0名、1:0名、B: 研修の目的・内容と組織の方針とが合致しないため 4:0名、3:1名、2:1名、1:0名、C: 活用するうえで必要となる予算の確保が難しいため 4:2名、3:0名、2:1名、1:0名、D: 同僚の理解と協力を得ることが難しいため 4:0名、3:0名、2:1名、1:1名、E: 日本の経験が自国の状況と大きく相違しているため 4:3名、3:1名、2:0名、1:0名であった。

研修の成果をどのように活用する予定であるかについて選択肢を用いて優先度の高い順に 4 から 1 までのスケールで回答を求めた。

A: 政策・制度の改善 4:4名、3:8名、2:1名、1:0名、B: 資金の確保 4:2名、3:7名、2:1名、1:1名、C: 施設の改善 4:5名、3:5名、2:0名、1:2名、D: 組織の仕組みの改善 4:7名、3:6名、2:0名、1:0名、E: 業務に運用されている技術・方法の改善 4:7名、3:4名、2:0名、1:1名、F: 個人の能力の向上や姿勢の変化 4:9名、3:4名、2:0名、1:0名であった。

3. JICA-net 遠隔技術協力によるフォローアップ報告会に対する評価

多くの参加者や関係者が、他国の取り組みを直接耳にすることは参考になり、自身のモチベーション高揚に大いに役立ったと評価した。

・帰国研修員の評価

エジプト：相対的な進捗状況を確認することができ、今後の取り組みの中で考えるところが見えてきたとともに、今後の励みになった。定期的開催されると、関係者への影響等に大きなものが期待できる。

ラオス：非常に有効な時間であり、他国の経験や進捗状況を知る機会が得られ、たいへん励みになった。定期的開催することによって、問題解決のヒントを得たり、モチベーションの維持を図ることができる。もう少し時間をとって欲しかった。本邦研修のDVDは、帰国後の普及活動に使っている。

ガーナ：時間の経過がまったく気にならないほど充実していた。画面を通して同窓生の表情をうかがい知ることができたのがよかった。

カメルーン：モチベーションは高まったが、自分たちの抱える問題の解決に結びつくものは無かった。先進事例を聞き、課題解決のため、引き続き関係機関等への働き掛けを続けていこうと思った。先生と話をすることができたのは嬉しかったが、先生とは常にメールでコンタクトしているので、取り立てて何かを得られたということは無かった。本邦研修のDVDは機会があるたびに上映しているが、期待が大きくなりすぎないよう注意している。養護教諭の育成に係る遠隔セミナーを行って欲しい。

・学校保健関係者の評価

エジプト：関係者を巻き込むという観点からは、プロジェクト・サイトでの実施が望ましい。認識のずれを修正するのに役立った。複数の機関が関係するプロジェクトなので、こういった機会により多くの関係者が参加する方が、効果が上がると思う。

ラオス：研修員からの報告だけでは知りえないことを知ることができた。今後は、国内における活動の輪を広げていきたい。

ガーナ：他国が頑張っている姿を見てたいへん励みになったとともに、他国との比較において、自国の進捗状況や課題を深く理解することができた。後輩の研修員が着実に取り組みを進めていることが理解できた。定期的開催してもらえらるなら、自国内での研修・普及に弾みがつくし、ネットワークの構築にも役に立つ。日本を身近に感じることができた。本邦研修のDVDは教材として利用したい。(規格の違いにより再生できていなかった。)フォローアップの録画を組織内で共有したい。給食ボランティアや養護教諭の育成をテーマに遠隔セミナーを行って欲しい。

カメルーン：プロジェクトの実現に向けて、引き続き頑張ろうという気持ちになった。今後もこういった機会を設けて欲しい。

研修企画を担当しているJICA中部センターでは、このパイロット事業の成果を受けて、2010年度よりJICA-netの遠隔技術を資料したプロGRESS報告会を実施する予定である。

活動名	16. 小児保健医療情報サービス活動
-----	--------------------

◆ これまでの取り組み

母子保健情報サービスとして、地域の保健・医療・福祉・教育等関係者や一般県民に対して、パンフレット、ホームページ、地域のイベントへの展示などを利用して情報提供（子どもの虐待予防、子どもの事故予防、予防接種、遺伝相談など母子保健に関すること）を行っている。

なお、広報委員会の事務局として、当センターのホームページについて、医療部門を始めとするセンターの案内やその他情報の新規・更新等、コンテンツ管理の役割を担っている。また、あいち小児保健医療総合センターだより「アチェメックの風」を作成し、当センターのPRに努めている。

◆ 活動内容

1. ホームページの運営

- ・ ホームページを利用した母子保健情報の提供
- ・ ページ閲覧件数 2,259,278 件（H21.4～H22.3）月平均 188,273 件
- ・ ホームページによる情報サービス 年間の記事更新回数 37 回

2. 広報誌の発行

あいち小児保健医療総合センターだより「アチェメックの風」 年4回発行
（第21号～第24号）

3. こども図書室の活動

年間 利用者数	子ども			保護者等
	就学前	小学生	中高生	
6,660 人	1,122 人	1,732 人	456 人	3,350 人

(1) 図書貸し出し：貸出冊数 延べ 4,506 冊、1 人平均 3.0 冊

(2) お話し会：年間 57 回、参加者数 1,317 人

◆ 評価方法

- ・ ホームページ利用者数測定と内容の調査

◆ 評価

今年度のホームページの年間ページ閲覧件数は昨年度 298,894 件減少していた。これは、22 年 1 月にホームページのリニューアルを行い、ページ閲覧のしやすさを追求した構成にしたための減少で、12 月までのアクセス件数では、昨年度の同時期 1,757,892 件に比べ 1,802,581 件と 44,689 件増加していた。

「月別ベスト 10」では、12 月までは予防接種アンケート調査回答医療機関（予防接種実施機関の一覧）が毎月トップであった。22 年 1 月以降は、診療科案内が続けてトップであり、当センターの受診に関わるページの閲覧が多かった。閲覧内容も、リニューアルにより状況に変化をもたらすことが予測されるため、今後の様子を観察していく必要があると考える。

平成21年度 ホームページの閲覧件数 【各月ベスト10一覧】

4月			5月			6月		
153,053件			234,339件			241,750件		
1	アンケート調査回答医療機関	12,597	1	アンケート調査回答医療機関	21,540	1	アンケート調査回答医療機関	23,712
2	センター案内	5,215	2	センター案内	8,831	2	センター案内	9,493
3	診療内容案内	2,509	3	診療内容案内	4,346	3	診療内容案内	4,726
4	医師紹介	2,378	4	医師紹介	4,218	4	医師紹介	4,103
5	知多バス時刻表	1,742	5	アクセス方法	2,834	5	アクセス方法	2,920
6	アクセス方法	1,616	6	外来診療担当医一覧	2,819	6	外来診療担当医一覧	2,538
7	急性糸球体腎炎	1,582	7	急性糸球体腎炎	2,607	7	急性糸球体腎炎	2,384
8	血液検査	1,575	8	知多バス時刻表	2,449	8	知多バス時刻表	2,331
9	受診方法	979	9	受診方法	1,767	9	受診方法	1,590
10	ネフローゼ症候群	720	10	保健医療相談	1,583	10	ネフローゼ症候群	1,233

7月			8月			9月		
279,436件			172,819件			202,893件		
1	アンケート調査回答医療機関	27,680	1	アンケート調査回答医療機関	15,858	1	アンケート調査回答医療機関	18,019
2	センター案内	10,746	2	センター案内	6,684	2	センター案内	7,495
3	診療内容案内	4,998	3	診療内容案内	3,135	3	診療内容案内	3,796
4	医師紹介	4,437	4	医師紹介	2,857	4	医師紹介	3,319
5	アクセス方法	3,279	5	アクセス方法	2,131	5	外来診療担当医一覧	1,799
6	知多バス時刻表	2,850	6	知多バス時刻表	1,851	6	急性糸球体腎炎	1,703
7	急性糸球体腎炎	2,660	7	急性糸球体腎炎	1,585	7	受診方法	1,551
8	受診方法	2,008	8	受診方法	1,232	8	看護部案内	1,020
9	看護部案内	1,622	9	ネフローゼ症候群	1,145	9	ボランティア	669
10	ネフローゼ症候群	1,596	10	看護部案内	810	10	子どものための患者・家族会	536

10月			11月			12月		
192,818件			126,338件			199,155件		
1	アンケート調査回答医療機関	17,130	1	アンケート調査回答医療機関	11,701	1	アンケート調査回答医療機関	20,157
2	センター案内	7,042	2	センター案内	4,428	2	センター案内	8,070
3	診療内容案内	3,178	3	診療内容案内	1,901	3	診療内容案内	3,315
4	医師紹介	2,945	4	医師紹介	1,790	4	医師紹介	2,984
5	アクセス方法	2,101	5	アクセス方法	1,168	5	診療科案内	2,822
6	外来診療担当医一覧	1,703	6	急性糸球体腎炎	1,165	6	ネフローゼ症候群	2,654
7	急性糸球体腎炎	1,596	7	受診方法	1,021	7	急性糸球体腎炎	2,142
8	受診方法	1,210	8	ネフローゼ症候群	807	8	受診方法	1,806
9	ネフローゼ症候群	1,149	9	看護部案内	734	9	看護部案内	1,180
10	看護部案内	1,095	10	保健医療相談	563	10	血液検査	1,048

1月			2月			3月		
141,930件			95,243件			105,671件		
1	診療科案内	3,786	1	診療科案内	3459	1	診療科案内	3,786
2	アクセス方法	1,672	2	受診方法	1854	2	受診方法	1,672
3	外来診療担当医一覧	1,589	3	外来診療担当医一覧	1339	3	外来診療担当医一覧	1,589
4	受診方法	1,579	4	アクセス方法	1144	4	アクセス方法	1,579
5	医師紹介(名簿)	1,198	5	センター案内	1033	5	センター案内	1,198
6	ネフローゼ説明	1,097	6	募集	1015	6	募集	1,097
7	急性糸球体腎炎	783	7	ネフローゼ症候群	567	7	子ども事故予防ハウスのご案内	783
8	先天性股関節脱臼	757	8	子ども事故予防ハウスのご案内	528	8	子どもの健康情報	757
9	センター案内	747	9	子どもの健康情報	512	9	育児もしもしキャッチ	633
10	募集	633	10	病棟案内	469	10	知多バス時刻表	531

第3章 活動別の実績とその評価

【こども図書室の活動】

外来通院や入院している子どものための図書室を設置し運営している。

1. こども図書室の活動実施内容

(1) 閲覧 時間：火曜日～金曜日 12：30～16：30 毎週土曜日 10：00～15：00

※夏休み・冬休み期間中 10：00～15：00

対象者：病棟及び外来を利用している患儿とその家族、当センター職員

(2) 貸出 対象者：病棟に入院している患儿とその家族、当センター職員

(3) お話し会（ボランティアの協力を得て開催） 57回、参加者数 1,317人

※ボランティア活動として、アトリウムや病棟でのお話し会も行われた。

2. こども図書室利用状況

(1) 利用者数 6,660人（開室日数 241日）

月	利用者計	子ども			保護者	
		就学前	小学生	中高生		
月別	H21.4月	543	84	129	40	290
	H21.5月	431	88	90	30	223
	H21.6月	585	87	159	24	315
	H21.7月	714	118	242	45	309
	H21.8月	1039	147	327	97	468
	H21.9月	500	73	131	36	260
	H21.10月	469	74	114	29	252
	H21.11月	341	54	83	19	185
	H21.12月	516	103	106	32	275
	H22.1月	596	117	145	36	298
	H22.2月	485	85	119	32	249
	H22.3月	441	92	87	36	226
	計	6660	1122	1732	456	3350
曜日別	火曜日	1170	206	290	51	623
	1日平均	27	5	7	1	14
	水曜日	1224	194	311	65	654
	1日平均	26	4	6	1	14
	木曜日	965	127	250	72	516
	1日平均	20	3	5	2	11
	金曜日	1186	201	297	74	614
	1日平均	23	4	6	1	12
	土曜日	2115	394	584	194	943
	1日平均	41	8	11	4	18
1日平均利用者	28	5	7	2	14	

(2) 図書貸出状況（1人1週間3冊まで）

月		利用者		
		人数	冊数	1人平均冊数
月別	H21.4月	142	390	2.7
	H21.5月	99	291	2.9
	H21.6月	148	413	2.8
	H21.7月	156	424	2.7
	H21.8月	220	613	2.8
	H21.9月	120	388	3.2
	H21.10月	91	268	2.9
	H21.11月	75	235	3.1
	H21.12月	130	416	3.2
	H22.1月	131	427	3.3
	H22.2月	110	340	3.1
	H22.3月	100	301	3.0
	計	1522	4506	3.0
曜日別	火曜日	298	925	3.1
	水曜日	334	973	2.9
	木曜日	340	963	2.8
	金曜日	293	903	3.1
	土曜日	257	742	2.9
	計	1522	4506	3.0

(3) インターネット利用者数

（利用条件 1人1回30分まで）

曜日別	利用者	1日平均人数
火曜日	44	1.0
水曜日	56	1.2
木曜日	72	1.5
金曜日	91	1.8
土曜日	129	2.5
計	392	1.6